

夜空を見上げていたら

Celtmyth

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

◇夜、空を眺めていたらいつの間にか始まってしまった話。

※注意事項

- ・内容は思うがままに、最後は真面目に書いた作品です。
 - ・他の作品が進まないときに書く息抜き用です。内容はあまり念入りにはしていません。
 - ・主人公たちと出会うのは2期エピソード頃を予定します。
 - ・出会った頃に本格的に執筆するかアンケートを採る予定です。
- 以上の事を踏まえてお読み下さい。

目次

春の日記

4月の日記・その1 ≠ 『子供が寝る頃に』	1
4月の日記・その2 ≠ 『友達との休日』	5
4月の日記・その3 ≠ 『魚料理は美味しい』	10
4月の日記・その4 ≠ 『友達は見えていた』	15
5月の日記・その1 ≠ 『開花の時』	18
5月の日記・その2 ≠ 『誰のハッピーエンド?』	24

冬の日記

11月の日記・その1 ≠ 『闇夜の取引』	33
11月の日記・その2 ≠ 『子供会議』	37
12月の日記・その1 ≠ 『邂逅の目撃』	42
12月の日記・その2 ≠ 『Bibliothek』	47
12月の日記・その3 ≠ 『闇の書』	52
12月の日記・その4 ≠ 『隠者 対 運命』	58
12月の日記・23日 ≠ 『見つめる先は・前』	63
12月の日記・他筆 ≠ 『見つめる先は・後』	70
12月の日記・聖夜 ≠ 『花を咲かせただけ』	78
登場人物紹介 (※本編閲覧推奨)	88
12月の日記・月末 ≠ 『彼女たちの語らい』	94

春の日記

4月の日記・その1≠『子供が寝る頃に』

4月×日

サクラがなくなりはじめると始業式も前のことだつて思えるようになった。クラスメイトとの仲は、フツーかな。笑い合ってるからなかま外れじゃないと思う。ともだちのはんちゃんはいつものようにあくろばつとをやってる。宿題をたまにわすれるのはごあいきょう、つて言うのかな？ その時はちゃんと先生にあやまって、ちゃんとおわらせてからわたしてる。今日もそうだった。べんきようは、とりあえずノートの書きわすがなければいいって言われてるからわすれないようにしてる。そしてウチでよみ返すといいつてことも。それで宿題をたまにわすれちゃうけど。でも今日はわすれずにちゃんとやった。

このあと、夜の空がキレイだから2かいから見ようと思う。ながれ星が見えたらいいね。そしたら遠くにすんでる父さん母さんにげんきだつて伝えたいな。

4月□日

今日は昨日の夜のことがあったから朝に書く。空を見ててウトウトしてたけど空気をゴグンとしたからベットに入った。そしたら夢でようせいさんに会った。なにかねがいがありますかって言ってたけどぼくはようせいさんのねがいをかなえてつて言つた。そんな夢を見て、おぼえていたから日記に書いたよ。

がつこうでようせいさんの話をはんちゃんにおしえると「そんなこともあるでござる」とさか立ちしながら言つた。今日は宿題はちゃんとやったからなにもなかった。でもかわりにじゅぎょうでよばれるのが多かった。げせぬ。

4月?日

ようせんさんの夢を見てから何日かすぎるとそのようせいさんのこえが聞こえるようになった。また夢だと思っただけどうようせいさんがちがうってハッキリ言っただからちがうんだと思うことにした。そしてようせいさんはじぶんがジュエルシードってよばれてるけど名前がほしいって言ったから、道にさいていた『タンポポ』ってしようとしたらダメって言われて、うちに帰って国語じてんを使った。ジュエルシードって名前いがいにナンバー3って言うこと。ジュエルシードは21あること。21で大アルカナって言うのがあったから3ばんめの『女帝』のつながりから『ヴェヌス』って名前に決まった。男のボクに女らしい名前は変だったけど気に入ったみたいだからなつとくした。

名前がきまるとヴェヌスはおじさんと話したいらしい。いまはボクの口を使えば話ができるらしいからやってみることにした。おじさんはおどろいていたけどさいごはわかってくれたみたいでよかった。

|||||

4月?日・夜

『改めてお話がしたいのですか、よろしいでしょうか?』

「……子供は寝る時間なんだが」

『はい。マスターは寝ております。私が体を動かしていますが夢遊病の状態ですので問題ありません』

男の子なのに長い髪で両目を隠した子供と、優しげな顔立ちに反して体は筋肉質な男性が対面していた。最も、男の子は本来の男の子ではなかった。

「……何が聞きたいんだ?」

『恐らくですが貴方はこの世界の人間ではありませんね』

「なるほど。それはキミというロストロギアの力かい?」

『当たらずも遠からず、ですね』

「そうかい。とりあえず座って話さないかい」

『わかりました』

男性こと久保田忠は男の子、久保田天吹の体を動かすヴェヌスに提案するとリビングのソファーまで移動してそこで対面するように腰を下ろす。

「まず最初の質問は『イエス』だ。私はミッドチルダの生まれだ。ただ私は真つ当な半生でなくてね。今は足を洗ってこの第97管理外界で友人たちの忘れ形見を育てている」

『では次元犯罪者だったと?』

「正確には傭兵だったね。向こうでは死んだことになっているが、時空管理局と接触すればすぐに正体が知れる。その程度の隠蔽だよ」
『なるほど。では私の存在は邪魔ですか?』

子供とは思えない眼差し。その片目からは『Ⅲ』の数字が現れている。しかし忠は気圧されることなく穏やかに答える。

「いや、むしろキミならその子を私以上に守れると思っている。違うかい?」

『はい。加えてまだ私は開花に向けて成長中です。まさか落下し、たまたま口に入り込んだ子供が適合者とは思いませんでしたが』

『そんな理由で一体化したのかい……』

『偶然、と言う物は時に大きな影響が起こる訳です。マスターの魔力の質であればひと月もかからず開花できます。その間、私は私自身のダミーを、他のジュエルシードが落下した海に紛れ込ませます。これで一応は回収する者たちの目を誤魔化せるでしょう』

「おや、キミ自身は回収しないのかい? 言ってみればキミの同胞、兄弟みたいなものじゃないのか?」

『私たちは適合者に対して一つしか対応できません。適合者に巡り会えなかった個体はサブとして役割が与えられますが重要という訳ではありません。状況によっては回収をしますがそれは回収する者たちの手から離れた後でよろしいでしょう』

「それはわかるのかい?」

『離れていても繋がりがありますから。そこから情報を確認しています』

「さすがはロストロギアだね」

感心した忠はそう言つて先ほどの眼差しを返すかのように険しい眼差しで睨んだ。

「そこ子は私にとつて恩人である二人の子供で、その子自身も大切な存在だ。だから守れ。一生、その力を持つてだ」

傭兵、と答えた肩書きに嘘のない殺気だった。子供相手であるが今はロストロギア・ジュエルシードことヴェヌスであるそれは受け流す。

『もちろんです。マスターの脅威は私が守ります。そしてマスターの願いも私が叶えます。故に貴方も、貴方の手で出来る事でお守りなさい』

「それこそ。だが私は一度汚れた身だ。私が枷となるなら、斬り捨てろ」

『承知しました』

その夜は静かに過ぎ去るのだった。

4月の日記・その2≠『友達との休日』

4月☆日

学校が終わった後、はんちゃんにヴェヌスを紹介した。妖精さんの事だつて伝えて、ヴェヌスとも話してさすがのはんちゃんも驚いていた。驚きすぎて近くの木を走って登ってた。それを見たヴェヌスは『魔導師』ですかつて言っただけどちがうと思う。はんちゃんもちがうつて言うからちがうだろう。

それからはんちゃんはウチに来ておじさんとごはんを食べた。豚肉が安かったからごはんはしょうが焼きとトン汁。おいしかったよ。ごはんを食べ終わったらはんちゃんはドロンと帰った。またヴェヌスが絶対に魔導師じゃないですかつて言っただけどちがうと思う。おじさんも魔導師じゃないだろうつて言っただけからちがうんだと思う。

それと今さら書くけど漢字がわかるようになった。なんでもヴェヌスが国語辞典を読んで覚えてそれを僕に反映？ したらしい。

4月\$日

ヴェヌスから魔力の扱い方を覚えるように言われたから今日からその練習を始めた。魔力はリンカーコアつて言う器官を使って空気中から魔力を取り込んで使うらしい。ちなみに僕は不活性？ だったのがヴェヌスを取り込んだ事でリンカーコアが活性化したらしいよ。

ヴェヌスが教えるとおりに魔力を吸収して、ため込む。最初は出来なかつたけどリンカーコアを意識、なんか胸元で呼吸するイメージでやると上手く出来た。それを繰り返して溜められる魔力量を計ると目安から大幅に超えてること。基準はよくわからないけど多いんだつて認識した。

続けて魔法の練習もやったよ。魔力の弾を飛ばしたり魔力で浮いたり、魔法使いたいな事が出来た。ただなんとなくだけ僕に合わない気がした。なんかこう、アレだ。理想はラスボスだ。なんて冗談で言ったら真面目に受け止めたヴェヌスが練習内容をガラリと変えた。これからはその練習内容をする事になった。

4月：日

今日は日曜日。はんちゃんと一緒に散歩にでかけた。ウチからすこし遠くまで行ったよ。移動する間は僕からは魔法の話を、はんちゃんからは修行の話をした。はんちゃんは昔から続けているから続けていくには何を考えておけばいいか聞くと「出来る事は応用し、出来ない事は基礎を把握するのでござる」と言う事らしい。よくわからないから素直にすることにした。途中でコンビでアイスを買った。またサッカーの試合をやったからそれを見ながら食べてた。夕方になってそろそろ帰ろうとすると木の根っこが生えてきて危なかったけど無事に帰り着いた。最後の最後でくたびれたよ。

|||||

4月：日・夕方

巨大な根っこに吞まれた街並みは無残の一言だったが、その中で二人は怪我らしい怪我もなくこの光景を見下ろしていた。

「はんちゃん大丈夫?」

「問題ないでござる。あのような鈍足に追いつかれるようでは拙者の面子に関わるでござるからな」

【本当に魔導師ではないのですか?】

「違うでござる。忍者でござる」

背中に虫の翅のような物を出して浮かぶ天吹と落ちてきたビルの壁に立つ藤乃阪奈。いきなり出現した根っこだったが二人は慌てずそれぞれの方法で行動し、そして落ち着いた所で改めて状況の確認をしていた。

「ねえヴェヌス。これってキミの関係?」

【ジュエルシードの暴走ですね。未封印の状態でしたからこうして発動してしまうのです】

「それは、ヴェヌス殿は大丈夫なのでござるか?」

【私は奇跡的確率で上手く正しく機能していますので問題ありません。そもそも懸念材料は私が私として目覚めた時点で解決しております。マスターに危害はありません】

「ならいいのでござる」

天吹の口、ではなく彼の横で出現する青い宝石からヴェヌスの声が発せられていた。この宝石こそがヴェヌスの本体ことジュエルシードであったがここのあるのは視覚で認識されるように出した幻影^{ホログラム}であり、本物はちゃんと天吹の中にある。なくても声は出せるが目で見える方がいいとのことだ。

「じゃあどうにかした方がいい？」

「いえ、放っておいてよろしいでしょう」

「え、放置でござるか？ ヴェヌス殿の同胞^{ほろから}では？」

【私たちは21個セットで真価を發揮する、と言う物ではありませんから。一個一個が独立した物です。1つでも目的を達成できればよろしいのです。回収はその後でも遅くはありません】

「開花、だっけ？」

【はい。それが種である私たちの目標です】

開花、それこそがジュエルシードが作られた本来の目的である。莫大な魔力と使用者の願いに反応する事から『願いが叶う宝石』と呼ばれるようになったロストロギア。しかし偶然とは言え天吹はその本来の目的に最適だったのは幸運だった。

「……そう言えば天吹殿、ヴェヌス殿。聞いていなかった事があるの
でござる」

「何？」

【なんででしょう？】

「ヴェヌス殿が開花できたのなら、天吹殿はどうなるでござるか？」

阪奈は静かに天吹を、彼の奥に宿るヴェヌスを見ているかの眼差しで問うた。そしてそれに答えたのは、天吹だった。

「人の枠から外れるらしいよ。ヴェヌスという花が咲くなら僕はそれを支える大地。運命共同体として将来を背負うことになるよ」

阪奈は目に見えない速度で何かを放った。飛んだ先には幻影のヴェヌス。しかし当たり前のようにそれをすり抜けて遠く反対側のビルの壁に突き刺さる。二人のいる場所から離れてそれは小さく見えるがクナイに似た物のようだった。

「失礼。八つ当たりでござる」

【なるほど。罵倒と受け取ります】

「喧嘩はダメだよ」

火種を蒔いたのはお前だろ、なんて言われそうな天吹の発言だが、そう言う者はいない。親友とも呼べる阪奈は彼の半生を知るが故に、ヴェヌスは自分を受け入れられる器はどんな人物であるか理解しているが故に。何より、天吹の瞳に拭えぬ陰があるが故に。

【……話を戻しましょう。回収しない一番の理由は他に回収する者がいるからです。もし接触すれば開花の障害になるでしょう】

「それならばいずれヴェヌス殿を回収にくるのでは？」

【その為のダミーは制作中ですし、ジャミングも行っています。ダミーができ次第、海に落ちた5つに紛れ込ませます】

「そんなことしてたの？」

【ご安をマスター。マスターには一切の負荷は掛かりません。ただダミーが完成した際には直に捨てて頂きたい】

「そこは魔法ではないのでござるな」

【魔法を使つては察知されますから。ご足労をお掛けしますがこれが一番安全です。それに、アレを相手するのは得策ではありません】

「アレ？」

二人がヴェヌスの言葉に首を傾げると、

すぐ近くで極太のレーザーが通り過ぎた。

「……天吹殿、事態は終息しそうでござるから帰ろうでござる」

「え、そうなの？」

【動じないマスターさすがです】

2人は回収する者に接触する事はなく、事件の影の中で傍観者であり続ける。きっかけ1つで繋がる縁は、いつの日になるのやら

4月の日記・その3≠『魚料理は美味しい』

4月へ日

あの根っこの事件から1週間が経った。今もヴェヌスが僕に合わせた魔法の練習を続けてるよ。練習にはんちゃんが一緒にいるのも当たり前になってきた。

前にラスボスっぽいほうがいいかなって言ってヴェヌスが新しく作った練習内容はとにかく体を作る事だった。魔法を使う魔力も、大きな魔法を使うのも使うのは自分の体。僕の魔力は十分に多いけど魔法を使う為の器はまだ小さくて脆い。それを克服する為にまず魔力を制御する練習だった。ヴェヌスが言うには制御が上手ければ無駄な消費もなくなるし、必然的に大きな魔法を使うのも上手くなるらしい。最初に魔法の弾を撃って、それから数日して同じように撃つたら目に見えて違ったあの時はなるほど確かになって思ったよ。

はんちゃんが魔法の練習に付き合ってくれたのもある。はんちゃんもはんちゃんて修行をやってるからアドバイスがすごく良い。魔力の制御をやっていると「楽な姿勢でやるといいでござる」と言われたら集中がやりやすくなったし、魔法の弾を撃っていると「拙者が的になるでござる」とやってみたら一発も当たらなかった、いわゆる濃い内容にできた。

成長できてるからコツコツやっていこう。

4月！日

今日は今さらだけどはんちゃんと一緒にヴェヌスからジュエルシードの話を聞いた。

ジュエルシードはヴェヌスのように適合する持ち主に宿り、そして開花するのが本来の目的。そして開花した花は持ち主の思考を瞬時にプログラム化し、それを実行する演算と制御を高速で行う。よくわからない説明だったけどはんちゃんが「つまり使いたいと思う魔法がすぐに使えるってこととござる」ってまとめてくれた。さすが。

でも誕生してから適合する相手に巡り会えず、逆に不完全な願いを実行してきたことから『願いを叶える宝石』としての認識になったら

しい。結果、まとまって保管された。それから保管された場所が遺跡と呼ばれるくらい放置されて、それが最近になって掘り出されたけど何者かに襲撃されてこの海鳴市に散らばったとのこと。その一個を僕が飲み込んだ訳だ。

4月%日

昨日、ジュエルシードの話聞いた今日で今度は散らばった他の20個を回収している人達の事を軽く教えてもらった。

僕は会ってないし、もちろんヴェヌスも会ってない。でも考えられる勢力は2つか3つらしい。1つ目はジュエルシードを発掘したスクライア一族。2つ目は襲撃し、海鳴市にばらまいた何者か。最後は時空管理局。ただ最後の管理局は大規模な出来事がない限りは来ないから今は最初の2つが回収している勢力、とヴェヌスは話してくれた。ヴェヌスのジュエルシードは隠蔽工作をしているから索敵に察知されないけど、さすがに数不足は不審がられるからその対策にダミーを作る。前に言ってた話だね。そしてそのダミーが完成したからすぐにでも海に放り投げに行くこととなった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

4月%日・10時頃

「……………」

極限まで集中した阪奈は握ったダミーのジュエルシードを海に向かって放り投げた。ジュエルシードは水切りで海面を跳ねてどんな距離を伸ばしていく。

「おう、さすがはんちゃん。手裏剣すごい」

「いや、手裏剣投げではないでござる。ただ距離を伸ばすだけの水切りでござる」

【既に30回は跳ねてますよ】

突堤からその様を眺める天吹がはしゃいでるが阪奈は特に自慢する事はなく、しかしヴェヌスには波をもともせず遠くへ行っていくダミーを呆れた感じに眺めている。そしてダミーは沈むことなく跳

ねながら消えていった。

「無事に終わったみたいだね」

そこへ陸の方で待っていた忠が近づいてくる。流石に海までは遠かった。なので彼に車を出してここに来たのだ。

「うん、はんちゃんに任せてよかったよ」

「そうか。ありがとうね阪奈ちゃん」

「友の頼みでござる。力になるのは当然でござる」

「相変わらずだねえ。ところで早いけどせっかくだから近くで昼食にしないかい？」

「拙者、新鮮な刺身が食べられるお店がいいでござる」

「じゃあ僕は魚のフライが食べられる所」

【私は内緒話が出る部屋がある場所】

「(キミ・お主) から (リクエスト・意見) があつたのは予想外 (だね。でござる)」

そしてお店に来た3人はそれぞれ料理を頼んでしばらく。

『それで阪奈、ジュエルシードを回収する者たちはわかりましたか？』

「ああ、わかったでござる」

最近の事を聞くかのようにヴェヌスが尋ねると彼女はあっさりと返した。それに忠も眼差しを険しくし、天吹も黙って言葉に耳を傾ける。

「この前、根つこの事件を解決させた者は高町なのと言う女子おなせでござる。彼女はこの海鳴市の者であるがユーノと言うフェレットに似た動物に協力しているようでござる」

「フェレット？」

「フェレットに似た動物でござる。なにやら人間くさいのでござるな」

「ああ、それは恐らく変身魔法で化けているんだろう。魔力の節約や怪我の治癒向上が出来るから元々は人間なんだろう」

『そのユーノの名前には覚えがありません。間違いなくスクライア一族

の者です』

阪奈の情報から忠とヴェヌスが内容を補う。

「それで、この前の休日に遠くから監視していたら別の者と相対していたでござる。こちらははまだ名前はわからぬでござるが高町なのはとは敵対する間柄かと」

「へえ」

『特徴は見ましたか』

「忠殿が貸して下さったスコープで結界？ を覗いてみた所、金髪でツインテールの女子でござった」

「また女の子なの？ 魔法少女？」

「正確には魔導師だよ天吹。それに魔法世界では資質があれば十分に人材として扱ってくれるんだ。私も活動し始めたのは8歳からだったからね」

『なかなか優秀だったのですね』

「下働きからだよ。現場に出たのは13歳からだ」

「日本人から見れば十分にお若いでござるよ」

どこか懐かしむ忠。全てを捨ててここで過ごす覚悟は、どれだけのものだったのだろうか。

『ですがこれで大まかに勢力が区分出来ました。スクライアの勢力は高町なのは。恐らく襲撃した者の勢力である金髪の少女。この2つが現在活動しているとみてよろしいでしょう』

「対策は必要かい？」

『そうですね。思った以上に開花が早くなりそうです。おおよそ5月には咲くでしょう。故に、どこにも察知されない場所を作りたいです』

「その頃まで状況は続くと思うのかい？」

『はい』

「それなら修行の最中、手頃な洞窟を見つけているでござるからそこへ今度案内するでござる」

『ありがとうございます』

ジュエルシードを巡る渦が起こる中でここにいる者たちはあくまで

不干渉を貫きながらその中心の一個を確保、いや横取りしようとしている。天吹と阪奈はまだ実感はないが忠は理解している。自分達がやろうとしているのは管理局に見つかればロストロギアの不法所持の罪に問われる事を。

「……なあ」

『開花できれば、今後何かあっても対応できますからね。頑張りましょう』

「あるの？」

『事実は小説よりも奇なり、と言うそうですね。ないとは言えませんが』

忠の懸念を読み取ったかのようなヴェヌスの言葉だった。いや察した上での物なのだろう。

それを聞いて傭兵だった頃の自分を思い出す。

(後で考える、だったな。昔の俺は)

なら今さら先の懸念はスツパリ考えるのをやめる事にした。

？

4月の日記・その4≠『友達は見えていた』

4月〃日

学校がおわった後、はんちゃんが見つけた洞窟へ行ったよ。歩いたら遠い場所に会ったけど飛べる僕がはんちゃんを運んで向かった。飛んでるときはヴェヌスが見えなくなる魔法と気付かれない魔法の2つを使ってバレなかった。そうやって到着した洞窟はちよつと肌寒いけどヴェヌスに取ってはちよつと良いらしい。

すぐに開花する場所にする準備を始める。バレないように、洞窟を壊さないようにする為の魔法を組み上げ始める。簡単に言えば結界を張る、つて事らしい。改めて魔法だなあつて思ったよ。その間、はんちゃんは天井にぶら下がって待っていてくれたよ。

作業して太陽が沈みかけた頃でヴェヌスは作業を終えた。邪魔をされたくないから凄く念入りにするから何日かかけてするらしい。その間、魔法の練習をどうするのか聞いてみると結果を作っているのも僕の体だから優先していた体作りは十分に出来てるつて。なら安心だね。

でも今日の晩ご飯、おじさん失敗してたみたいで酸っぱかった。

4月〃日

今日も洞窟で結界を念入りに張る作業。はんちゃんは外に出てカキイン、カキインつて音を鳴らしてた。何でもクナイの練習をしているそうだよ。そうして今日の分も終わって後はいつも通りの1日で、終わらなかつたよ。

そろそろこの日記を書こうとしたら地震の揺れを感じた。すぐにケータイで地震速報を確認しようとしたらヴェヌスがこれは次元震つて教えてくれた。なんでも他のジュエルシールドが刺激されて起きたらしい。しばらく揺れは続いたけどすぐに落ち着いた。どうやら回収してるとつちか、高町なのはちゃんか金髪の女の子が封印したみたいだ。

4月〃日

昨日の次元震の事をはんちゃんに教えた。リンカーコアがないか

らただの地震だと思ってたそう。ただリンカーコアがあっても知識があつてセンサーのような物がないとわからない物だから気にしなくて良いと思う。そんな話をしてるとヴェヌスがはんちゃんに今日から回収している2人の様子を見てきて欲しいって言った。次元震が起きたつて事は時空管理局が出てくる可能性が出てきたから、開花するための邪魔にならない為に対策を打ちたいらしい。はんちゃんは返事2つで引き受けてくれた。何が起こるかわからないから1日ごと次の日に教えてくれることになった。

なので今日ははんちゃんがない作業となった。基礎は出来たから残りは本格的な結界を張る作業になる。ヴェヌスが作業しているけどこの数日で並列思考マルチタスクを覚えて作業をしながら魔法の練習が出来るようになった。今じゃ5つは同時に出来るようになったけど、今は準備が優先だから2つまでしか使っていない。

それにして明日、はんちゃんから何が聞けるか楽しみだなあ。

|||||

4月7日・夕方

今日からジュエルシード争奪戦。その競争相手同士である少女たちの戦いをこれから眺めようとした阪奈は今の光景に眉を顰めていた。

「まさか昨日今日で出てくるとは、次元震が起こるまで傍観者でいたのでござるか？」

結界を通すゴーグル、の前に指で作った輪っかの奥を覗きながらその先に見える光景は今まさに2人の少女が衝突する所で止めた少年の姿だった。

(さて、これでヴェヌス殿が言っていた3つの勢力がそろつたと言う事でござるが、どうせ高町なのはは管理局に取り込まれるでござるな)

阪奈はまだ10歳の少女だが、忍者の修行として策略や謀略などの勉強をしてきたのでおおよそ先読みが出来る。

(対し、あの金髪の女子は厳しくなるでござるな。彼女の勢力がジュエルシードを横取りしている立場でござるからな。あ、逃亡し始めたでござる)

その少女と、彼女の仲間らしき犬耳を生やした女性が逃亡する姿が見えるが阪奈はそれを見て自分のここから離れ始めた。肉眼で見えたとしても声とかが拾える訳ではないため、これ以上は無意味と判断したからだ。

「管理局の事は明日忠殿に聞いてみるでござるか。せめてこちら側に顔を向けてたなら口の動きが見えたのでござるが……」

まさか読心術も使えるようだ。この少女、10歳にして魔法も使えないのに万能すぎである。

5月の日記・その1≠『開花の時』

4月@日

はんちゃんから時空管理局が現れたって教えてくれた。昨日、回収している2人を止めるように黒い服の男の子が現れたらしい。また魔法少女、じゃなかったね。

この話を聞いてヴェヌスはより隠蔽を念入りにすべきだって言った。管理局が介入したならこれからは人海戦術で残りのジュエルシードはすぐに回収されるだろうからいつそう慎重に動くべきだと言った。だからすぐに体に隠蔽が施されてちよつと痛かった。この時のはんちゃんの目は凄く尖ってたよ。

洞窟での作業もいつもより念入りだった。ここの隠蔽は最初の内
に終わってたけど更に二重三重にした。何が何でも察知されるわけがないとヴェヌスと頑張ってた。その間、はんちゃんはおじさんから管理局の話を知って今日もいなかった。

5月*日

管理局が現れてそろそろ10日が経ったね。今日まで変わらない日々だったけど日数の区切りが良いのとそろそろ洞窟の作業が終わりそうだから書き出しにはこう書いたよ。はんちゃんは僕に何かあっても対応できるように側にいる事が多くて、それ以外は管理局の繋がっていきそうな高町なのはの様子を見に行ったり、なにやらおじさんと話すことがあった。おじさんも管理局が来たって伝えてから地下室で何かやってる日々だった。

そんな終わりが見えていた頃、ヴェヌスからダミーが回収された事を教えてくれた。作業を止めてはんちゃんと話を聞いてみるとなんでも結果的には海にあった本物5個とダミー1個の6個は半々で回収されたそうで、ダミーは犬耳のお姉さんに回収された。はんちゃんいわく金髪の魔法少女側らしい。するとはんちゃんが海のジュエルシードを一気に回収されたならもう20個全てが回収し終わり、ダミー1個も合わせて全21個が回収された事になったって考えた。

するとヴェヌスは言った。実は開花の準備は終わってるって。

5月\$日

ジュエルシード争奪戦がそろそろ終わりに近づいてきた今日この頃。僕の方もヴェヌス開花が目の前まで来ていた。洞窟の準備も今日で終わるからあとは開花するだけだ。でも管理局が介入してしまふ懸念はまだある。するとおじさんが、「もし金髪の女の子の勢力がこの世界にいないなら、管理局はその本拠地へ向かう。だからその時に開花するならいい」と教えてくれた。曰く、次元犯罪者は活動する際に次元空間を行き来する艦か移動拠点を持つそうだから管理局はそこへ乗り込む為に地球から離れる可能性がある。その時に開花するといらしい。この事をはんちゃんに伝えたらその方が良いつて領いてくれた。

|||||

5月&日

天吹、阪奈、忠。3人は開花するための洞窟に集まっていた。そう、今日は管理局の艦が離れたのだ。ジュエルシードの気配に敏感なヴェヌス。いつの間にか管理局の艦を捕捉していた忠がそう報告したのだ。洞窟の準備が終わった天吹はすぐに動けるように学校は休み、阪奈もそれに合わせて休んでいた。学校側には天吹に家の用事が出来て、阪奈はその手伝いにと誤魔化した。

【それで開花を始めます】

「わかった」

3人の内、少しだけ洞窟の奥にいた天吹は答える。そして後ろに控えた忠と阪奈へと振り返る。阪奈はいつもの格好だがそのいつもの下にはアニメでよく見る忍者道具をしまい込んでるのをよく知っている。逆に忠は武器のような物、デバイスをいくつも装備していた。本人曰く、デバイスは高価な物で傭兵だった彼は中古品・廃棄品のデバイスを集めて修理や改造を自前で行い、結果として変形パターンを持たせず複数の機能特化したデバイスを使っていたそうだ。ちなみにその過程で傭兵でありながら上級のデバースマスターの知識と技術

を培っている。

「じゃあ始めるからおじさん、はんちゃん。お願い」

「ああ」

「いぎる」

2人は方が一に備えて開花までの防衛を任された。彼らの存在に管理局は気付いていないだろうが、ヴェヌスにとって開花はどうあっても邪魔はされたくない。警戒しすぎてもまだ足りないだろう。

「——天吹殿」

「なに？」

だが返事2つで返した阪奈がここで声を掛けた。

「拙者は天吹殿が選び、受け入れたのなら何も言わぬでござる。ただ——キミがどんなに変わっても私はキミのそばにいる。キミに嫌われても、私は離れないからね」

久々に彼女の素を聞いた天吹。しかし忠は初めてだったようで思わず阪奈へ顔を向けて驚いていた。

「うん、わかった」

「ええ。——と言うわけでヴェヌス殿、失敗なぞ許さぬでござる」

「ええ、そちらこそ邪魔者の警戒をしっかりと下さい。忠もよろしくお願いします」

「ああ。しかしキミたち、本当に仲が悪いね」

「そなの？」

「キミでキミもいつもの反応で逆に安心するな……」

挑発的な阪奈とヴェヌス、抜けた部分がかなり大きい天吹。唯一の大人の忠は緊張感が抜ける光景に肩の力が抜けていた。

「それじゃあそろそろ出るよ。いくよ阪奈ちゃん」

「承知したのでござる」

そんな忠は阪奈を連れて外へ向かい、そして姿が消えた。隠蔽には目視が遮断される魔法があったのでその効果だった。実際に2人はちゃんと洞窟の外にいる。

残った天吹は更に洞窟の奥へ入っていく。そしてある地点で立ち止まるとその場所を中心に魔法陣が出現した。しかも床だけではなく

壁や天井。しかも天吹が知るよしもないが記号と文字で形成される魔法陣が一般的だがこれには絵が大いに使われている。プログラムとも呼ばれる魔法の構築は理系的な数学や物理学だが、これは文系的な美術学や哲学が使われている。間違ひなく未知の魔法陣だ。

「それではマスター、始めます。私が浮かべる詠唱を言葉にして下さい」

「うん」

ホログラムのジュエルシードことヴェヌスが消えると天吹も目を閉じた。

「願いの種よ。この身に植えられし種よ。汝が求めた大地で培われた刻は、今をもって報われる」

静かに、静かに、言の葉が紡がれる。

「この巡りに感謝を。この成就に歓喜を。汝の開花が果たされた刻、その力は我に捧げよ」

ゆつくりと、ゆつくりと魔力が高まる。

「汝の願いは我に。汝の力は我に。汝の意義は我にあり。同意は既に果たされた。さあ、今こそ花を咲かせよ」

紡いだ言葉と高まった魔力がここで切り替わった。詠唱は終え、魔力は開花に使われる。洞窟の中は暴風で吹き荒れているがその中央にいる天吹の体はそれを一切感じさせず、洞窟も揺れの一瞬すらない。

そして天吹の体からジュエルシード・ヴェヌスが出現する。それは魔力を吸収し、表面にヒビが入る。しかしその奥から突起物が出現していた。

【詠唱確認。

条件——クリア。

魔力量——クリア。

手順——クリア。

これよりジュエルシードNo. III、個別登録名『ヴェヌス』。開花——
アカシックレコード・モード神智意識形態、レコード・オブ・アルハザードへ移行します】

その名、彼女が聞いたら何を思っただろう。あらゆる望みが叶う理想郷の名前を。しかしこの場にいない彼女や、ここでその権利を手に入れようとする天吹は知るよしもない。

そしてヴェヌスの形態移行は一気に行われた。ジュエルシードが種の殻から新芽を出すようにヒビの奥から棘が何本も生え、そのまま肥大していく。既に菱形の形状ではなくまるでランダムの演算処理で設定したCG映像のように形状を変え、肥大していく。

そして1時間。既にジュエルシードの大きさから洞窟の天井まで届きそうになった頃、圧縮されていくように縮んでいく。形状の変化は終わっていないがすでにパターンが一定化している。そのまま小さく、天吹よりも小さくなるとそれを受け止めるかのように彼は無意識に両手を掲げる。

【——移行、終了】

その素っ気ない声に終了した。その声を聞いて天吹は掲げた両手を下ろし、ゆっくりと目を開く。

「……これが花か」

そこにあつたのは両手に覆えない程の、半透明の宝石で出来た花だった。花卉の数は多く中心は細かなカットがある球体だ。と思っ

ていると透過度と色が所々で変化している。

観察しながらじっと見つめていると中央の球体から光が放たれ、小人が出現した。

「……ヴェヌス？」

「はい。無事に開花が出来ました。感謝いたしますマスター」

現れた小人はヴェヌスであった。その姿はファンタジーの女王然としており、恐らくは天吹が名前の由来に反映した姿なのだろう。すると手に持った花——レコード・オブ・アルハザードは天吹の体へと入っていった。しかし出現した小人のヴェヌスはそのままだ。

「またホログラム？」

「いえ、この体は分身です。これからは常にマスターの側にいます」

「そっか」

そんな何気もない会話でヴェヌスと天吹の目的は果たされた。

？

5月の日記・その2≠『誰のハッピーエンド?』

5月&日

今日で開花が出来た。ジュエルシードからアカシックレコード・モードことレコード・オブ・アルハザードの形になった。見た目は蓮と菊を合わせた感じだ。蓮っぽいやけど花びらが細かくて多いから。それに小人の女王様って感じになった分身もヴェヌスの名前に合ってると思う。そんな小人のヴェヌスは僕の頭の上が定位置になった。こうして書いている時も頭にいるよ。

結局、邪魔者は現れる事がなくすぐにおじさんとはんちゃんを呼んで終わったことを知らせた。2人はまず頭にいたヴェヌスに驚き、レコード・オブ・アルハザードを見せると見入っていた。名前を伝えるとおじさんがもの凄く驚いたよ。なんでもアルハザードは望みが叶う理想郷の名前らしい。願いを叶えるジュエルシードはそこ事繋がったのかな？

その後は3人で仲良くウチで料理して楽しく食事した。ヴェヌスも一緒に食べたけど、体の大きさ以上に食べてたけどどこに入ったのかな？ 今聞いてみたけど秘密らしい。

5月#日

開花して翌日。学校が終わるとすぐに魔法がどうなったのか確認をした。ヴェヌスに聞くとと思うとおりの魔法が行使できるらしいけどその分魔力も大きく消費するらしい。一般的な魔法はむしろ普通より少なくなってるそう。今の状態なら大抵の事は出来るそうだけど何もないからせず、軽く魔法の試し打ちといつももの訓練をしただけで終わった。とりあえず魔力を増やさないとね。

|||||

5月☆日

「マスター、実は願って頂きたいことがあります」

そんなヴェヌスのお願いを叶える為にあの洞窟にまたやって来た

天吹。阪奈も一緒である。

「それで何を願えば良いの？」

「はい。実はダミーには追跡機能を付けてまして。もし可能なら他のジュエルシードを回収しようと考えていました。その結果、8個ほど回収が出来そうです」

「8個と言うと、金髪の子が回収していた分でごさるな」

「そうです。それが虚数空間に落ちたようなので回収します」

「僕が願えばすぐに出来る？」

「はい。イメージはダミーのNo.Ⅲを周辺にある物と一緒にここへ召喚するでよろしいです」

「わかった」

ヴェヌスの言葉通りのイメージを天吹は思い浮かべる。ジュエルシードの姿形を思い浮かべ、その周辺にあるもの全てをここに出すイメージ。すると天吹の目の前に魔法陣が出現する。しかもこの洞窟で描いていた物と同じ絵も取り入れられたものだ。

「——いよいよ」

「——承認。実行します」

その眩きに、ヴェヌスは以前のジュエルシード状態の似た声で応えた。すると魔法陣の回転速度が一気に上昇し、輝きを増していく。ただ何故か大きくなった。しかしそれでも天吹の願いを叶える為に魔法は実行され、出現された。

そして願った通りダミーの1個とジュエルシード8個、

加えて女性と巨大なポッド装置が出現した。

「？」

目の前のそれらに天吹は首を傾げた。そのそばで阪奈がいつの間にかクナイを握って静かに女性に近づく。改めて見ると魔女のような女性で手元には杖もある。そしてポッド装置の中は天吹たちより小さな女の子が収められていた。

その2つを見てもまだ天吹は首を傾げていたが、女性に近づいた阪

奈は手首を持ち上げたり口元に耳を近づけたりした。

「生きているでござるが、もう長くないでござる」

「そっか」

「どうするでござる？ おそらく天吹殿なら助けられるでござるが」

「うーん、どうしようか？」

阪奈の言葉に天吹が悩み始めると頭の上にいたヴェヌスが頭を軽く叩いた。

「なに、ヴェヌス？」

「悩むようでしたらその女性が何者か確認していかがですか？ 頭に手を置けば記憶などが読み取れるはずです」

「ふーん」

それを聞いて天吹は女性の頭の方へ移動する。ヴェヌスは頭から離れると回収したジュエルシードの方へ向かう。まあそっちが大事だろうなと思いつつながら女性の頭のそばでしゃがむとその額に手を当てる。

「アナタの事を教えて下さい」

そう願うと天吹の手の平と女性の額の間に魔法陣が出現する。普通よりか素早く回転する様はディスクの読み込みにも似ている。そうして数分間回り続けると魔法陣の回転が普段の速度に戻った。つまり読み取りが終わったのだ。

「……そっかあ」

「何がわかったでござるか？」

「この人、そこにいる女の子を生き返らせるためにジュエルシードを集めてアルハザードを目指してみたい。あとはんちゃん、その女の子が金髪の魔法少女、フェイトⅡテストロッタに似てるって気付いてたでしょ？」

「やっぱり別人でござったか。小柄であるし、妹でござろうなと——」

「ううん、姉らしいよ。ただフェイトはクローンだって」

「イヤネ？」

女性——プレシアⅡテストロッタから読み取った記憶から過去のこと、現在の事を知った天吹は淡々とその情報を伝える。そうしてい

ると8個のジュエルシードを翼か光輪のように背中に浮かせたヴェヌスが近づいてきて天吹の頭に手を置いた。

「失礼——同期、完了しました。ところでマスター、死者蘇生を試してみませんか？」

唐突な提案に他の2人から注目を浴びるヴェヌス。しかし阪奈の物はどこか剣幕があった。

「どのような理由でそんな提案をしたでござるか？」

「限界を知りたいのです。ジュエルシード8個分をサブユニットとして機能させましたから成功率は高くなっているでしょう」

「実験、でござるか」

「必要な事です」

剣呑としていた阪奈がヴェヌスと会話のやり取りをする度にそれが収まっていく。が、それでも消え去ってはいない。彼女も天吹の限界がどれだけなのか早めに把握しておく方が良いと理解している。しかしこれは——。

「ただし、行うのはその少女です」

するとヴェヌスがポッドの少女を指し示した。

「その子1人だけ？　なんで？」

「さすがに蘇生する魔力は1人分だけだからです」

「この婦人を回復させ、後日蘇生魔法を使うことは出来ないでござるか？」

「可能です。ですがその女性、プレシアⅡテストタロットは次元犯罪者です。匱えば管理局に対する不利となります。それはマスターの為になりません」

無慈悲な回答だった。2人とも救われる事が可能でありながらあえてその片方を捨てると言った。しかし、

「わかった」

「ふむ、余計なリスクは確かに避けたいござる」

2人はその提案に一切の不快を感じなかった。忍者で現実的な考えを持つ阪奈は理解出来る。そして天吹はそう言う物かと納得した。でも、天吹はそれならばと思った。

「ねえ、ヴェヌス——」

走馬燈だと、プレシアは思った。かつて愛娘のアリシアと来た花畑。最後の最期でその愛娘が「妹が欲しい」と言っていた場所。

未練も無念も多い。しかし現実離れたこの場所に来てもう先はないと理解していた。狂った妄念の炎は消え、ここにある自分はその残りカスだろうと。

「……本当、馬鹿ね」

思わず自虐する言葉がこぼれ出た。願わくば、残されたフェイトに幸せがあらんことを——。

「こんにちは」

そう祈っていると背後から聞いたことのない、子供の声が聞こえた。振り返るとそこには長い髪をした子供がいた。まだ幼いせいかな男の子か女の子かわからない。ただわかるのはプレシアの知らない子供。

「誰？」

「久保田天吹。プレシアさん、って呼んでいいかな？」

「構わないけど、本当に誰なの。私は貴方の事なんて知らないわ」

「うん。だって僕がプレシアさんの潜在意識に入るように願ったからね」

「願った？」

あまり正体をハッキリさせない回答だった。しかしそんな状態に変化が起こる。天吹の胸元から小人の女性が出現された。プレシアは融合型デバイスと思ったがその女性の背にはよく知る物が円を描いていた。

「ジュエルシード……！」

「そうです。そして私はヴェヌスと言います。ですが貴女にはこう名

乗りました。ジュエルシード、アカシックレコード・モード神智意識形態、レコード・オブ・アルハザードです」

その単語にプレシアは思わず身を乗り出し、しかし力が入らずその場から離れられなかった。

「アル、ハザード？」

「はい。貴女が目指した理想郷。その全知を行使する存在です。最もこの体は分身で本体はマスターと一体化しています。では本題に入りましょう。実はマスターに貴女の娘、アリシアⅡテストアロツサの蘇生を提案しました」

その言葉にプレシアの思考は空白——、になりそうな所を理性で押し止める。まさか最後の最期で願いが叶うのかと。しかし、いくら狂気が抜けたとは言え長く探し続けた身としてはすぐには飛びつかない。ヴェヌスの言葉を最後まで聞くまでは。

「しかし私はマスターに危険が及ぶ要素は限りなく背負いたくはありません。蘇生の提案もまだ私がどれだけの不可能を可能にするか不明であるためです。故に、貴女の娘は蘇生しても次元犯罪者である貴女は助けません」

それは、納得出来て無慈悲な言葉だった。彼らと自分はなんら関係もない。求めた力がすぐ近くにあり、叶えてくれると言うがそこに自分はいない。でも不思議と、さつき胸の奥で湧き上がった気持ちほど動かなかった。どうやらアリシアへの思いは残っていたが自分自身の事はそこまでではなかったのだろう。思わず笑ってしまった。

「おかしい事を言いましたか？」

「言っていないわ。今さらになって私がどんな自分だったのか知れただけよ。それとあなた達がアリシアを生き返らせてくれると言うのなら逆にお願いたいくらいわ。それで私が死ぬのは構わな——」

「あー、違う違う」

提案を受け入れてこのまま身を任せていいと語っているの同然に話していたプレシアを天吹は言葉を割り込ませて、続けて言った。

「プレシアさんは死ぬけど、死なないよ」

「え？」

「……実はマスターがここに追加を願ったのです。娘を蘇生させ、貴女を見捨てる。その後、貴女を蘇生可能な状態で保管すると」

言葉足らずの天吹をヴェヌスが捕捉した。要するに、プレシアを助ける可能性を残してくれるというのだ。

「マスター曰く、今の時点で蘇生すると私たちの不利となる。しかし別の誰かが、その不利を相殺できる何かを持つ誰かが代わりに背負うなら問題ないと言いました。故に貴女の遺体は保管することになりました」

「それ、結局は私の事も助けてあげるってことじゃない」

「可能性は低いですよ。力を持つ者が望まなければ貴女は蘇生されませんから」

「問題ないわ」

「そうですか。——マスター。話は以上です」

「うん。それじゃあプレシアさん、眠る前にこの子と話をしてね」
「え？」

天吹が頷くとヴェヌスはその肩に乗ってそのまま振り返る。それと入れ替わるよう、その子から、あの子が現れた。

「ああ、ああ………っ！」

それはこれから深い眠りにつく彼女に与えられた、語り合いの時間だった。

弱々しかった呼吸が少しずつ遠くなっていく。そんなプレシアの額に2つの手が重ねてある。1つは天吹の手。もう1つは、蘇ったアリシアの手であった。

重ねた手の周りには球体のように輝く立体の魔法陣。これが輝いてから2人は眠ったように静かだった。

そう、既にアリシアの蘇生を終えていた。天吹がプレシアの精神世界に入るよりも先に。それはこれから蘇る可能性が低い、長い眠りにつくプレシアとアリシアに親子の時間を与える為だった。蘇生の魔

法に使った魔力は大幅に使ってしまったが。

そんな状態が数分。魔法陣が縮んで消えてしまうと2人は同時に目を開けた。

「終わったね」

「うん、ありがとう」

「別に良いよ。だって親子が何も話さないで終わっちゃ寂しいでしょ？」

なんて事ないと言う天吹だったがアリシアに取っては至高の時間を与えてくれた相手だった。

「戻ってきたでござるか」

「ああ、はんちゃん。もうシアちゃん※アリシアの事の着替え持ってきたの？」

「元々、ここは拙者の修行場でござる。常に着替えは保管してるでござる」

改めて聞けば呆れるほどの用意周到さ。ちなみに何故着替えを取りに行ったかというと布1枚で体を隠すアリシアの為である。そしてこの布も阪奈が常日頃から備えている道具の1つである。なぜ子供の体を覆えるほどの布を隠し持っているのだろうか、はあえて考えない。

「どうでしたか？」

「うん。お母さんがしたことは許される事じゃないから最初は叱ったけど、それ以上に会えて嬉しかった」

ヴェヌスが問いかけるとアリシアは寂しそうに答えた。実はアリシアにはプレシアの記憶から今日までの出来事を与えられた。アリシアが死んでから、虚数空間に落ちた何十年分の出来事を。その中には記憶だけの妹の事も。

しかもそれを行ったのは天吹だった。ヴェヌスではなく、彼がだ。本人はプレシアと話すなら必要だと言って与えたのだった。

「それじゃあ保管するよ」

「……うん、お願い」

2人がまだ息が残るプレシアから離れる。その2人のそばに阪奈

は寄ると、これからする事を見守った。

そして天吹は両手を掲げて眩く

「——おやすみ」

【——承認。実行します】

そんな一言と同時にプレシアが横たわる地面に魔法陣が出現する。そしてそれは立体的に球体へと変えていき、それに合わせてプレシアの体を浮かべる。その姿を見て、

アリシアは涙を流しながらいつか再会できる奇跡を願い、

阪奈はこれから見えぬ未来からこの2人を守る事を強く思い、

天吹はただ思うままに行動する。

3人がそれぞれの思いを抱きながら、プレシアはこの場所で眠る事となる。魔法陣は彼女の体を包み込み、そして魔力は水晶として体を覆っていく。

——パアン。

その音は両手を掲げた天吹が手を叩いた音だった。それと同時に水晶が変わっていた魔力が弾けるように、または急凍するかのよう一気に加速する。プレシアの体を水晶で包み込むために。

「おやすみ。いつか、フェイトと一緒に会いに来るからね」

そんな母親を、アリシアはそう眩いた。

アルハザードの復活
ジュエルシード編、終了。

冬の日記

11月の日記・その1≠『闇夜の取引』

11月?日

ジュエルシードの件から早くも半年も過ぎたよ。シアちゃんも第三小に転校て来たけど11歳だったから学年は違う。でも昼休みでご飯を食べるから離れてる気はそんなにしなかった。なかなか人気者になったけど初対面の人からは1、2年生に間違えられるよ。

その後の夏休みなんてははんちゃんとシアちゃんと一緒になつて遊んだよ。キャンプで山に行ったらクマに追い掛けられたり、海水浴で海に行ったらサメに追い掛けられたり、飛行訓練で空を飛んでみたらカラスに追い掛けられたりしたのは楽しかったよ。全部ヴェヌスの幻影だったけど。

そんなこんなな夏休みが明けての2学期は運動会やら何やらと学校行事でてんやわんや。運動会なんてはんちゃんの独走だった。赤白決めの時点勝敗が決まったと言わんばかりの喜びと悲しみの声が教室に響いた。

抜粋するならこの辺かな? 他の話題があつたとしても明日以降の日記で改めて書こう。

11月#日

魔法、と言うよりレコード・オブ・アルハザードの使い方は慣れたよ。シアちゃんとプレシアさん程の願いは願ってないけど魔力量は増えたし、イメージだけで魔法も発動できる。曰く、『想像』すること形を成す。絵のイメージをすると写真のように鮮明にする流れらしい。最初は時間をかけて発動していたのが瞬間的に出来るようになった。ただこれって白紙から始めてるようなものでおじさんとシアちゃんは驚いていた。

魔法と言えばシアちゃんも魔法が上手くなったね。復活した影響は年齢だけじゃなくてリンカーコアの発現したからね。ヴェヌスと

おじさんの指導でメキメキ上げていって今じゃAランクの実力くらいだって。デバイスもおじさんの地下室で『フォーチュンドロップ』って言うのを作ったよ。足りない材料は僕とヴェヌスで出して上げたけどおじさんは遠い目をしてたなあ。

11月&日

そろそろ12月が近くなって今以上に寒くなってきた。本当なら寒くなくなるけどなんかつまんないからしない。と言うかはんちゃんに『忍者式防寒対策』で大丈夫だったから。12月と言えばクリスマスがある。今年はシアちゃんがいるから騒がしいだろうね。もうおじさんにケーキは二段だよっ！ っってお願ひしてたから。そうなるとクリスマスプレゼントは今から考えた方がいいかも。ヴェヌスがいるからなんでも出せるけどせっかくなら自分のお小遣いで何か用意したいね。毎年巻物を用意するはんちゃんみたいに何かになる物がいいかな？

そういえばおじさん、今日は遅くなるって行ってたけど遅すぎるな。思ってたより時間が掛かっているのかな？ 鍵は持つてるだろうし、今日はもう寝よう。

|||||

11月&日

仕事の都合で夜遅くに帰宅していた忠は街灯の下でパイポを啜っていた。手荷物なんてないまさに手ぶらの状態。つまり、全くの無防備だった。

「……それで、用件はなんだい？」

啜っていたパイポを外して闇の向こうにいる誰かに尋ねた。すると足音が聞こえ、街灯でその足下が見えたがそこまでだった。

「魔導師とお見受けするが、如何に？」

声色は女性の物だったがその奥に感じるのは数多の戦いを乗り越えてきた匂いを感じ取った。

「魔導師であると聞かれればそうだと答えられるが、名乗るなら傭兵がしつくりくるよ。元が付くけどね」

「そうか。ならば魔力を賭けて戦って貰う」

チャキリと、金属の音が鳴った。その音が剣の類いと気付いて近接系の魔導師と判断する。であればベルカ式と考え、しかしそれにしても鋭さがあると違和感があつた。

しかしまだ忠も対応出来る場面だ。常備しているデバイスは3機。十二全の戦闘は出来ないが時間稼ぎからの逃亡には十全の装備だ。その上で返答する。

「断る。が、魔力はあげてもいい」

「何?」

相手がわずかに力を弱め、警戒を強める。辻斬り、とは聞こえが悪いがそう言った立場である事も否定できない彼女は忠の降伏には裏があると考えた。

「条件はなんだ?」

「2つだ。1つは魔力を奪われて意識を失うだろう私に変わって救急車を呼んでくれ。私は組織という物に属してなくてね。今倒れれば朝まで誰も見付けて貰えないだろうからね」

「わかった。承ろう」

「もう1つ。私は2人の子供を預かっている身でね。一応は魔法とは縁がある。その2人には手を出さないで欲しい。見分け方は、そうだね。前髪の長い男の子と金髪の8歳ぐらいの女の子だ」

「……それも承知した」

淡々と条件を伝えるとあっさりと言える程に受け入れられた。そして交戦の意志は消え去り、代わりに何かが出現した。

「約束は守ろう。仲間達にも周知させる。その2人の子供には決して手を出さない」と

「感謝するよ」

「いや、むしろ貴方の献身に頭が下がる。では、魔力を頂かせて貰う」
「ああ」

そして忠が意識不明で病院に運ばれた連絡が天吹たちに届いたのは、この1時間後であった。

11月の日記・その2≠『子供会議』

11月*日

昨日の夜、おじさんが病院に運ばれたって電話が来るとすぐにタクシーを呼んでシアちゃんと向かった。子供の電話は疑われたけどおじさんが病院に運ばれた事を伝えるとなんとか来てくれてよかった。

到着するとお医者さんがおじさんの所まで案内してくれて、何故かタクシーの運転手さんも一緒に来ていくとベッドで横になるおじさんと会う。意識がないらしく、先生が言うには女の人がおじさんを見付けて救急車を呼んでくれたらしい。ただその女の人は家族を待たせる訳にいかないと、お医者さんに謝罪とお願いをして病院を後にしたらしい。

その後、僕とシアちゃんはそのまま病院でお泊まり。子供を保護者のいない家に帰らせるのは心配だからって。学校はお医者さんが電話してくれたらしい。その間、おじさんをこっそり診断したヴェヌスが原因を突き止めていた。おじさんはリンカーコアの魔力が奪われて、その影響で意識不明になったって。どういう事かという誰かに魔力を奪われたからだって。また何かが起こってるみたいだ。

そんなこんなで夕方。病院にはんちゃんがやって来た。はんちゃんにも原因を伝えた上でおじさんの意識が戻らない以上は入院し続ける事を伝えるとはんちゃんの家で厄介になることになった。そう言うわけで今ははんちゃんの家で日記を書いているよ。本当ならこの忍者屋敷みたいな家のことを書きたいけどそれどころじゃないから今度にするね。

11月\$日

おじさんの意識が戻った。その時は学校にいたけど唯一の保護者だったから早めに行かせて貰った。病院に到着してすぐにおじさんの所に向かうと笑顔で出迎えてくれた。おじさんは口では過労だつて言ったけど念話でヴェヌスの診断を伝えるとおじさんはそれを認めてくれた。ただおじさんは僕とシアちゃんに手を出さない代わり

に自分の魔力を差し出した。そして犯人の事は教えてくれなかった。夕方にきたはんちゃんにこの事を伝えたら僕らが近づかないための気遣いだって。

その後、お医者さんは何日かおじさんの様子を見てから退院が出来るらしい。それを聞いたはんちゃんは僕らの家で作戦会議をしたよ。その結果、3人そのまま家に泊まり込んだけどね。

|||||

11月\$日

「それでは『魔力強盗の対策会議』を始めるでござる〜」

「待ってましたー!」

「と言っても子供3人と一機の私だけです」

「お茶濃い〜……」

久保田家のリビングで囲むように天吹、阪奈、アリシア、ヴェヌスが集う。中心には何枚かの紙とお茶と串団子が乗ったテーブルがある。ちなみにお茶と串団子は阪奈の家からの持参である。

「まず事の流れを改めて振り返るでござる。忠殿がリンカーコアの魔力を奪われてから数日。意識は戻ったでござるが魔力の回復には至っていないでござる」

「そうだね。ちゃんとした設備があったら回復も早いだろうけど地球にそんなのはないからね。天吹くんとヴェヌスなら出来るけどね」

「それ、おじさんに断られたから」

「マスターが望まないなら私はなにもしません」

「いや、これは忠殿の判断が正しいでござる。自然治癒より早く復帰すればなにかがあると思われるでござる」

阪奈の言う通りである。この地球で、と思うだろうが半年前までは管理局が現れる事件が起きた。つまりはまだその方面の繋がりがこの町には出来ており、ヴェヌスを宿す天吹や蘇生したアリシア、封印されてるプレシアと管理局にバレると不味い事を抱えている。目を向けられないようにするには何もないと振る舞う方が良いのだ。

「それって私たちの事を心配してだよ。でも事件は終わったし、そこまで警戒はしなくていいんじゃない？」

「そうでござるな。でも今回、この世界にいる忠殿を襲い……いや、素直に魔力を差し出したでござるから接触が正しいでござるな。要するに犯人は魔法文化のないこの世界にいる可能性があるのでござる」

「確かに。いくらジュエルシード事件があったとは言え、魔力を強奪する場所としては不適切ですからね」

「あれ、それじゃあ僕やシアちゃんは？」

「マスターとアリシアの魔力反応は私が隠蔽を施しているのでバレません。ただ忠にはしていなかったなのでそれが今回に繋がったのでしょうか」

「そっかー。でもおじさんなら頼んでも断るだろうね」

「忠殿ならそうでござるな」

うんうんと頷く阪奈はテーブルに置かれた紙束の1枚を一番上に出した。その用紙には刑事ドラマで捜査する際によく見る相関図が書かれていた。

「拙者達にとって始まりは忠殿でござるから忠殿が中心でござる。そこに犯人が接触したでござるが、もう1人気になる人物がいるでござる」

「え？ そんな人がいるの？」

「忠殿を助けてくれた婦人でござる。彼女は病院まで付き添った後、家の事情で帰ったと医者は言っていたでござる。見ず知らぬ相手を助ける物が天吹殿たち身内が到着するまで付き添わぬは少々矛盾しているでござる」

「……もしかして、その女の人が犯人かもしれないの阪奈は思ってる？」

「第一発見者が怪しい。それは誰もが思う心理でござるよ」

「おお。なんかクールでカッコイイ女性って感じだね」

「アリシア、そう言った感想は胸の内にとまって下さい」

阪奈は相関図に『女性』を書いて忠に向けての矢印に『救助』を書く。そしてその『女性』と『犯人』にイコールを書いて『同一人物？』

と書く。

「犯人像はわからぬでござるが助けて頂いた婦人は病院の先生から聞けたでござる。20代で桃色の総髪。生真面目な雰囲気であったそうでござる」

「……総髪って?」

「ポニーテールでござる」

「普通にそう言えば?」

「基本、拙者はカタカナが苦手でござる」

「貴女のそれはキラ付けでしょう? (笑顔)」

「フフツ、そうでござるな (笑顔)」

「(相変わらず仲が悪いなあ)」

「あ、お団子美味しい」

火花をチラつかせる阪奈とヴェヌスをちよつと面白そうにアリスアは眺めていた。

「で、阪奈。貴女はその女性を探すのですか?」

「その通りでござる。魔力を持たない拙者なら追っ手の類と思われないでござろう。まあ故に念話が出来ないのは惜しいでござるが」

「じゃあ作ってあげようか、通信機?」

「え、あるの?」

「うん。と言っても天吹くんだよ、それ言ったの」

「え?」

「アレの事ではありませんか? 阪奈とも念話がしたいと聞いてきて肯定した件です」

「そうそう、それ」

「あく、そう言えば話してたね」

天吹はアリスアがデバイスを作っていた頃、ふと念話だけでも使えないか聞いた事を思い出していた。

「おじさんでも作れないかって話もしたね」

「はい。と言っても設計図をマスターが望めば作成可能です。もちろんマスター自身が生み出すことも可能です」

「うん、だから天吹くんに設計図を出して貰って私が作るの」

「いや、天吹殿に頼めば……」

「ダクメツ！ 女の子なんだからデザインとか拘ろうよ！ 阪奈だつて忍者っぽいのがいいでしょっ！」

「うぬ、確かにでござる」

「忍者っぽい？」

「むしろ隠密に適した形と言う事では？ であればマスターには不向きでしょう」

「そだね。じゃあ設計図出すね。——出てきて」

「——承認。作成します」

ヴェヌスが応えるとテーブルにあつた紙の一枚が浮かび、ペンもなく白い面に図形が浮かんでいく。それが数秒で終わり、ユラユラとアリシアの前に落ちた。

「どうぞ」

「うん、ありがと。うーん、材料はうちの地下室でもある物みたいだし、数日で中身は出来そうだよ。大ききからヘッドホンタイプかな。阪奈ちゃん、そう言う訳だからデザインは考えてね」

「了解でござる。要望だけ詰めるでござるからその後で話し合うでござる」

「うんうん、楽しみにしてるよ」

「ござる。さて、であれば他の視点から考えられる可能性でござるが……」

阪奈が話を戻してこれからの予想や対策を話していく。結局、今夜の3人はこの家で一泊する事となった。

12月の日記・その1≠『邂逅の目撃』

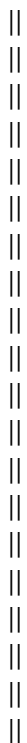
12月?日

12月になった。少し前までならクリスマスの事を考えてたけど今は魔力強奪の事件の話が多い。はんちゃんは僕作画シアちゃん製作はんちゃんデザインの話通通信機、名称「空耳」を装備して放課後、件の女性を探してる。見付かれればすぐ連絡するって言ったけど今日まで連絡がないから見付かってないだろう。でもはんちゃんは簡単に見付かるわけじゃないって言ってた。犯人が魔力を集めているなら魔導師が少ないこの地球より他の世界で集めた方がいいから。ヴェヌスとシアちゃんも同じ意見だったよ。

でも収穫がなかったわけじゃない。人目の付かない場所、路地裏とかに争った後を見付けてた。壊された跡とか汚れとかじゃなくてそんな匂いがするって言うのが忍者のはんちゃんの認識だ。この地球に魔導師はいないから犯人はここにはいない、が最初の考えだったけどどこでも魔力を集めてるかもしれない。色々と話し合うと地球にいる魔導師じゃなくて違う世界に来た魔導師がここで戦ったって結論だ。そうなるこの地球は徐々に魔導師が行き来するようになってるか、僕たちが探している犯人を追ってきている人達か。また騒がしくなるかもしれないね。

12月<日

この地球でもよく現れる可能性が出てくるとはんちゃんは高町なのはちゃんを見張る事になった。以前から様子を定期的に見てたけどもしかしたらあの子が狙われるかもしれないからだって。前からシアちゃんがこっそり妹の事を調査して欲しいって言ってたけどなんかヤバい気配があるからしっかり見張るのはやめてたんだよね。でも手がかりが欲しい所だから今回はリスクを承知で行くらしい。それを聞いたシアちゃんは妹の情報を絶対見付けて来てって念押ししてたね。まあそんな早く手がかりが見付かる訳がないよね。



12月◇日

「そう思っただけ日記を書いたんだけどなあ」

『まさかその日に狙われるとは』

ビルの一角の屋上。そこにはロープで姿を隠した天吹たち3人の姿があった。そして目の前には広く覆われた結界が張られており、その向こうでは高町なのはとハンマーを振り回す赤いドレスを着た少女が戦っていた。実際には遠い場所だがそこは天吹のおかげでテレビのようにその光景を映し出している。

「拙者も驚きでござった。見張っておいたら高町なのはの姿が消えたでござったから」

『おそらく結界魔法で特定の相手を取り込んだのでしよう』

「じゃあ私や天吹くんもあの結界魔法だったら囚われてた？」

『問題ありません。捕獲する類いの魔法も回避できるように施してますから』

天吹の口で胸を張ったように答える。しかしいつものように小人の分身体を出さないのはそれなりに警戒している証だった。決して自惚れている訳ではない。

「しかし、相手側は強いでござるな。まるで空を飛ぶ戦士でござる」

そして阪奈がなのはと対峙している少女に目を向けていた。天吹とアリシアは高町なのはがどれだけ強いのか知らない。知っていると言えば阪奈だけが、それがなかったとしてもドレスの少女は強かった。砲撃を出したなのはも凄いが一方的に攻めている様はそう思わずにはいられなかった。そしてそのまま2人は建物の中へと消えていく。

『……何者かが結界内に転送してきました。これは』

唐突にヴェヌスが察知した。すぐに映像を建物の内部へ変えようとしたがそれよりも先にドレスの少女が飛び出し、その後を追うようになるのは、ではない少女が飛び出した。

「っ！ フェイト！ フェイトだ!!」

思わず映像の中に飛び込まんとするアリシアを素早く阪奈が抑えた。

「アリシア殿、これは幻影でござるから飛び込めばすり抜けるでござる」

「ごめんごめん。でもフェイトが地球に来てるって知ったら体が動いちゃって」

『それは構いませんが、今の状況ではそうも言ってもらえませんよ。増援はもう一方にも来ています』

「え？」

「(ズ)ギン(ズ)？」

ヴェヌスが報告すると映像に映るのはフェイトとアルフの2人が少女を追い詰める光景だ。増援が来る様子は――。

「ホントに来た」

呟いたのは天吹だった。フェイトには剣を持った白い服の女性。アルフには褐色肌で犬耳尻尾の青い服を着た男性が襲い掛かった。人が増えた事で天吹はそれぞれが映し出されるように画面も増やす。移ったのはなのは、フェイト、アルフ。そしてどこかで見たような髪と瞳の色をした少年なのはたちに仕掛けてきた3人。さらには薄い緑色の衣装を着た女性。計8人。

「フェイトにアルフ、なのはちゃんしかわからない」

『この少年は見覚えがあります。スクライア一族のユーノです』

「確か変身魔法でフェレットの姿に化けていた魔導師でござるか」

「みただよ。なんか髪の色と目の色が一緒だし」

「ござるか。ならば残りの3人が相手側、何よりこの総髪の剣士が忠殿の魔力を奪った婦人でござるか」

『でしようね』

3人が注目しているのは剣士の女性。阪奈が病院の先生から尋ねた特徴と一致している。

「ヴェヌス殿。天吹殿の魔法で犯人たちを追跡する事はできでござるか？」

『出来ませ、が接触を目的するなら魔力パターン記録して探索する事

も出来ませす』

「ふむ、その本心はなんでござるか？」

『犯人側が所持している本はロストログニアです。逆探知される可能性が』

「え、されちゃうの？」

『ええ。私は願いを實現させる物ですが、それはその瞬間に願った範囲です。継続的に対処するにはマスターが傍にいるかマスターが望み続けなくてはなりません』

それは無理だね、と天吹は内心で思った。

全能とも思えたレコード・オブ・アルハザードの欠点。いや願った時点では何でも叶うのならプラスマイナスではプラスに大振りである。ただ阪奈の提案はそのプラスに飲み込まれたマイナスだっただけだ。

「ではそれで。拙者が今まで通り足で探すでござる」

「わかった。ヴェヌス、あの4人を見付けるための情報を集めて」

「――承認。記録を開始します」

天吹が願うと4人を移す画面からグラフやらチャートやら文字列やらと色々な物が出現する。特に目立っているのは数値を上げ続けているパーセント表記。これが集めた情報の具合を示しているのだろう。

「フェイト……」

しかしアリシアはそんな物を見ていなかった。見ていたのは劣勢になっていく自身の妹だ。本当なら飛び出して助けに生きたい。でも自分ではこの結界を突破できる力はなく、可能な天吹は作業中だ。例え天吹の手が空いていたとしても彼女にはもう1人の家族、母親のプレシアのこともあった。

彼女はこの半年、妹と会う事を願いながらも母親が過ごせる未来を願っている。だが今はそのどちらにも手に取れない。自分の存在や未熟さ、時間と多くの懸念がある。わかっている。でもやっぱり胸の内は家族を想い続けていた。

「……助けない？」

そんなアリシアに作業中だった天吹はそんな事を尋ねた。アリシアはそれを聞き、しかし首を振る。

「ううん、大丈夫。なんては嘘だけど、助けにでちゃ天吹くんたちに迷惑が掛かるし、それにフェイトだって混乱しちゃうよ。飛び出すなら落ち付いた場所で飛び出すよ」

「わかった」

その言葉に納得して天吹は作業に集中する。

そんな彼の横顔を見て、この半年で理解した天吹を、改めてこう評した。

「(本当に危なっかしい子だね、天吹くん)」

12月の日記・その2≠『Bibliothek』

12月、日

昨夜、高町なのはちゃん達と犯人達の戦いを見届けた後、見付からないように帰宅した。ただしはんちゃんの家だよ。忍者一家のせいかな、はんちゃんのお父さん（中学生ぐらい若い）とお母さん（ボツ、キユツ、ボンのお姉さん）は夜中出歩いてても何も言わない。前にシアちゃんが尋ねると『何かしてるんだろ？ 身を守るなら何も言わない』って返した。はんちゃん曰く、アレは全部知ってるらしい。忍者の耳は壁の耳だった。

そしてはんちゃんは僕が集めた情報からシアちゃんと作った探知機で改めて搜索を始めた。この日は見付からなかったけど代わりに高町なのはちゃんの様子を見に行った。おじさんと同じように魔力を奪われた筈なのにもう歩き回ってた。あとフェイトちゃんが海鳴市に引越してきたそう。それを聞いたシアちゃんはしやいでたよ。そしてフェイトちゃんの様子を見て来てってはんちゃんにせがんでた。無表情で「無理でござる」って返事しながら肩を揺さぶられる光景はよくドラマで見る光景だった。ヴェヌスは笑ってたけど。

12月十日

今日はおじさんのお見舞いに行ったついでにこの前の戦闘の事を伝えた。頭を抱えたけどなんか僕らの行動は予想していたみたいで起こることはしなかったよ。代わりにわかった事を教えてくれて言われた。

お医者さんや看護師さんが気を使って病室からいなくなった後で映像とかを見せた。ポニーテールのお姉さんがおじさんを襲った事はこの時に確認できた。ただおじさん、集めた情報を見てたらちよつと固まったけど何か心当たりがあったのかも知れない。何を教えてくれなかったけど。その後で管理局がこつちに来ている事、と言うよりシアちゃんがフェイトちゃんが来ている事に興奮して話していた

事におじさんは困惑していた。その上でありがとうってシアちゃん
の頭を撫でた。

12月!日

あと数日でおじさんも退院が出来るって聞いてから1日。少し落
とし穴やら隠し扉やら隠し武器庫がたくさんあるはんちゃんの家
のお世話になるのも終わりそう、なんて思うとちよつと寂しい気もす
る。と、女の子の家が名残惜しいって男の子的にどうなんだろう?そ
んな事を学校で思った今日、あと宿題でクリスマスについて調べま
しようってのが出た。来週までの期間だけど早めに題材を決めよう
と帰りに風芽丘図書館で本を借りようと思った。ただはんちゃんは
探索に、シアちゃんは魔法の練習をしたいから1人で行くことになっ
た。ああ、ヴェヌスと一心団体だから1人じゃないか。

そんな事を考えながら図書館に来て本を探していると、あのポニー
テールの女の人がいたよ。その事をはんちゃん達に怒られた。解せ
ぬ。

|||||

12月!日

「すみません」

天吹は恐れも躊躇いもなく、その女性に声を掛けた。

「? なん、で、しよう……」

それに反応して女性——シグナムは振り返り、そして目を見開い
た。彼女が見下ろしているのは目を隠した髪の長い男の子。それ
は先週ほど魔力を蒐集した男性が言っていた子供の1人と特徴が一
致していた。

「もしかしておじさんを助けてくれた人ですか?」

そしてそれを天吹自身で証明していた。

まさかの邂逅にシグナムは内心、動揺していたが決して顔には出さ
なかった。人違い、と言えはいいのだがわざわざ自分に声を掛けたの

だからある程度の確信があったのだろうし、何より自分は誤魔化す事は苦手だった。

「……それは11月の終わり頃か？」

「うん」

「なら私だな。ちよつと待つててくれ」

正直に答え、いったん待たせるとシグナムは友人と楽しく話す主に声を掛ける。

「お話中、すみません」

「ん、どないしたん？」

「実は知り合いの子供に会いまして。少し話したいのですがよろしいでしょうか？」

「そうなん。別にエエよ」

「ありがとうございます」

許可を貰うとすぐに天吹の元へ戻る。天吹も素直に待つていたがその裏ではヴェヌスが隠蔽を念入りに行っていた。

「少し離れた場所で話そう」

「はい」

天吹は先に移動するシグナムに付いていく。

その間、シグナムは天吹が魔導師か否か確認していた。が、ヴェヌスのおかげで魔力を感知されず念話すら受信しない。これによりシグナムは天吹をリンカーコアを持たない子供と判断する。そして少し離れたスペースに来るとシグナムは天吹と再び向き合い、先に門灯を始めた。

「あの人は今、どうしてる？」

「まだ入院してるけどもうすぐ退院できるって。おじさん、感謝したいなって言ってたよ」

「そうか」

天吹が言っているのは本当だった。シグナムからすれば約束を守ってくれている事に対する礼だと理解するが、それを受け取る資格が自分にはないと皮肉を抱く。

「おじさん、と呼んでいるが親戚なのか？」

「ううん。両親のお友達。今はおじさんが保護者になってくれるの。あとシアちゃんって子も一緒の3人だよ」

「保護者？」

両親の友達が保護者。その事からある事実を察する。あの時、忠が言っていた『預かっている』とはそういう事だと。

「すまない。哀しい事を思い出させてしまったようだ」

「気にしないでいいよ。寂しいことはないから」

「そうか。そう言えばシアと言う子もいると言ったな。せっかくだから見せて貰うことは出来るか？」

「うん、ケータイに写真があるから」

天吹はなんて事のない感じにケータイを取り出し、写真の画面を映し出す。

「この子だよ」

「そう——」

それを見てシグナムは二度目の驚きを体験した。なぜならそこに移っていたのは忠と天吹、そしてシアと言うフェイト・テスタロッサに似た少女だったから。

「……その、この子もキミと似た境遇なのか？」

「うん。でも元気で明るい子だよ。生き別れた妹がいるみたいで、いつかその子と会いたいっていつも言ってる」

「そうか、生き別れの……」

「あとこれでもシアちゃん、11歳の五年生だよ」

「何？」

妹と聞いて他人のそら似と思ったが年齢を聞くとその考えはひっくり返る。つまりはこのシアという少女とフェイトは実の姉妹だと。

対し、天吹はなんて事なくしていたがヴェヌスはフェイトにアリスアの事が伝わる可能性を抱いていた。

『(マスター、アリスアの事を伝えていいんですか?)』

『(でも生き別れて伝えたから大丈夫じゃない? それにシアちゃんも遭遇して襲われるかも知れないし)』

『(アリスアなら逃走するだけの實力はありますから心配はないと思

います()』『あ、そうなの()』

余計なお世話だったかな？ と天吹はちよつと反省した。

「もういい？」

「ああ、ありがとう」

「気にしないで。ねえ、おじさんが退院したら会ってくれない？ おじさんもお礼が言いたいと思うから」

「そうか。だがすまない。少々忙しくてな。しばらく都合が付かないんだ」

「そうなの？」

シグナムの言う忙しいは魔力蒐集の事だ。それはヴェヌスも予想して天吹に呟いている。それを聞いても天吹にとっては会えないのかと思う程度だった。

「じゃあ機会があつたら」

「そうしてくれ。話はもういいか？」

「うん」

「そうか。おじさんを大事にするんだぞ」

「うん。じゃあね」

「ああ」

シグナムは天吹を横切るように主の所へ歩き始め、天吹は手を振りながら彼女を見送った。そしてその後。

「あ、連絡先聞いてない」

うっかりしたなど、天吹は反省した。しかし彼はこの後、2人の少女から大いに説教される事を知らない。

12月の日記・その3≠『闇の書』

12月@日

はんちゃんとしアちゃんに怒られてしばらくシアちゃんと行動する事になった。また勝手に話さないようにする為だつて。あとヴェヌスじゃ止めないつて言うのも理由の1つだった。

そしてはんちゃんは僕が剣士のお姉さんと会った風芽丘図書館と大きな病院で探索し始めた。僕が剣士のお姉さんと出会ったとき、他に誰かいなかったか聞かれたから車いすの女の子と話していた事を伝えた。それを聞いてその女の子がこの海鳴市が拠点なのは確かだつて。ただこの二カ所の周辺を探索するんじゃないやなくてこの場所からバスが通る当たりを調べるんだつて。まずは手頃な移動手段を使っている前提で拠点を探すらしい。何度もバス停を降りるの？
って聞いたら候補が出てくるからそこから探すらしいよ。その間、僕としアちゃんが図書館で聞き込み。表向きはシアちゃんもあってお札が言いたいからにしてる。

12月ㄱ日

明日には退院できるおじさんのお見舞いに行つた。今日は先に荷物をいくつか先に持って帰る為だ。ただ魔力はまだ回復しきつてないから魔法は難しいつてヴェヌスが言っていた。家に帰ってからほつたらかしたつた所の掃除をしたよ。魔法を使えば早い所だけどなんか考えるのが面倒くさいから自分の手でやった。と思つたけどヴェヌスが等身大で手伝ってくれたからこれつて魔法に入るのかな？

そんな夜。はんちゃんがまた犯人達の戦いに遭遇した。今回も転送して行こうとしたけど今回は人数が多いし黒い服の男の子が結界の外を飛び回つて何かを探していたからはんちゃん1人で観戦したよ。そんなはんちゃんから仮面を被つた人が現れたつて。はんちゃんから見るとこの人、なんか独善的に見えたらしい。

12月▽日

今日はおじさんの退院日だ。途中経過で定期的に診察に行かないといけないって。それでも帰ってくるのはいつもの日常に戻ったって感じだ。今日は特別に学校をシアちゃんとはんちゃんと一緒に休んでおじさんを出迎えて、そのまま退院祝いの買い出しと一緒にしてウチに帰った。その後は精一杯にはしゃいで、体力が残っている内に片付けをした。そして今日はおじさんを交えて改めて犯人について話し合ったよ。やっぱりおじさんは正体に心当たりがあった。犯人は闇の書に選ばれた主。そしてあの剣士のお姉さん達は守護騎士ヴォルケンリッター。名前はかつこよかった。

|||||

12月▽日

「ロストロギア闇の書。それがこの事件の中心だよ」

忠は静かに、天吹たちに告げた。

「この魔導書は厄介な代物でね。全ての機能を使うにはリンカーコアの魔力を蒐集して666の頁を埋めなきゃならないが、その苦労に見合うだけの物だろうし、蒐集した際には魔法もコピー出来る。完成したなら魔法のデパートだよ。ただ闇の書は破壊の力しかなく、前例においても制御できずに暴走したそうだし」

「忠殿。前例との事でござるが、その闇の書は何度も同じ事を繰り返しているのをごさるか？」

「そうだ。闇の書の厄介な所だね。闇の書を破壊してもすぐに復元にして次の持ち主を探して転移する。その際には蒐集した頁はリセットするからまた魔力の蒐集となる。そして完成すれば暴走。これの繰り返しさ」

呆れるほど凶悪な仕様だと3人と1機は思う。以前のジュエルシードも大変な代物だったが今回はまさに世界に危機とも言えるからだ。

「……じゃあなのはちゃんの魔法とかバンバン撃っちゃうのかな？」

「確かに。ただコピーした魔法は術式を組み直す必要があるから別の効果になったりするらしいしね」

「ねえおじさん。おじさんはなんで闇の書を知ってるの?」

「……直接的じゃないが縁があつてね。管理局のデータをハッキングして調べた事なんだ」

「えっ!? それってものすごく危ない事だよ!!」

「私は傭兵だがグレーな傭兵だからね。基本的には非合法だったんだよ」

「ですが、忠が情報を知っていたおかげでこうして相手が見えるようになりましたが」

「デバイスに慰められるとは思わなかったなあ」

少し場の空気が緩くなつたが天吹(アルハザード並の実現力)、阪奈(ガチ忍者)、アリシア(蘇生少女)、ヴェヌス(ある意味の元凶)なんて存在がいる時点で真つ当ではなかった。グレーな傭兵だった忠が霞む程には。

「さて、話の続きだ。闇の書の機能の一つに守護騎士ヴォルケンリッターと言う物がある。主を守護する4人の魔法生命体。まさか私もその1人に襲われたとは思わなかったよ」

「忠殿。それはつまり守護騎士とは思わなかったとも聞こえるでござるが?」

「その通りだよ。情報とは違ったからね」

「違つてどんな所が?」

「管理局の情報になるが、彼女たちは主の命令を実行するだけのプログラム。感情を見せたなんてなかった。だからあの時、礼儀正しく決闘を望んだ姿勢で結びつかなかったのさ」

「ふむ……。ヴェヌス殿、其方の見解を聞かせて貰つてよいでござるか?」

守護騎士ヴォルケンリッターの話聞いて阪奈が意見を求めたのはヴェヌスだった。少々冷淡かも知れないが、プログラムと聞いてそれに近い彼女を指名した。

ヴェヌスは特に気にした様子はなく、天吹の頭の上から自分の意見

を口にする。

「おそらくは感情はあったのでしょう。しかし歴代の主がそれを求めなかったのでしょうか。どんな姿形であれ闇の書の機能の一つです。人間性よりも成果を求めたのでしょうか。」

「じゃあ今回の主さんは人間らしくしていいって事なのかな?」

「そうですね。今代は人格者なのでしょう。であればある仮説が浮かびます」

「それは?」

「守護騎士達が独断で魔力を蒐集している可能性があります」

ヴェヌスの仮説に納得した素振りを見せたのは阪奈だけだった。闇の書を知っていた忠は疑念を感じており、天吹とアリシアに至っては『そうか』と言う感じだった。

「マスターとアリシアはともかく、忠は納得出来ないようですね」

「いや、キミの可能性を否定しているわけじゃないんだ。ただ判断材料は足りない。なら複数の可能性を考慮した行動を目指すべきだ」

「ならこの間の新情報を提供するでござる。携帯電話のカメラで画質は少々荒いでござるが」

「では私が修正しましょう。阪奈、失礼しますよ」

「どうぞでござる」

阪奈がヴェヌスに向かってケータイを差し出すと触れることなく、魔法陣を自分と阪奈のケータイに出現させた。その中から最新の写真データを取り出し、修正する。

「……できました。お見せしますね」

ものの3秒で作業を終えたヴェヌスは十数枚の映像を皆の中心で出現させる。守護騎士たちはもちろん、なのはたちや管理局員。そして新たに登場した仮面の男性の物もあった。

「この仮面の者は守護騎士を救ったでござるが、どうも知り合いではないようで——」

「阪奈ちゃん」

「ハイメン?」

説明の途中、忠が遮りその説明していた仮面の男性を指さす。

「その仮面の男を映した写真。あれは一瞬の物じゃないよね？」

「ごぎるよ。相手の正体が後にわかるように特徴的な場面を写真に収めたでござる。相手と話す姿勢や攻撃の瞬間でござるな」

「そうか。そうか……」

「心当たりがあるのでござるか？」

「凄くね。いや、縁が繋がり続けると驚くを超えて肩の力を抜けるよ。うん」

1人納得したような忠。するとゆっくりと立ち上がった。

「少し席を外すよ」

「えっ？ 今のこの謎の仮面の男の正体は!? 的な流れじゃないかな？」

「悪いけどこれはちよつと言えない。私の過去に関わる人だからね」
「だから今から確認しに行くのでござるか？」

「この手には察しいいね阪奈ちゃん。ちよつと電話をしてくるだけや」

「まあ忠殿ならわざわざ敵を呼ぶ真似はしないでござるな」

「当たり前だよ。それじゃあちゃんと話し合うんだよ。ただし慎重に行動するようにね」

「はい」

「ござる」

「わかりました」

席を外した忠は地下室に向かった。傭兵の名残を集めた数々の品の中から埃を被った物を手に取った。それは一見して通信端末の用であった。

「んっ、んんっ」

わざとらしい咳払いと共に端末を操作する。そして耳に当て、繋がるのを待つ。

『——もしもし。誰かな?』

繋がった相手は目的の人物だった。それを確認し、忠は応える。

「ようおっさん。元気してたか」

声色も変わり、いつもの忠ではなかった。そこにいたのはかつて『信頼すべき傭兵』と呼ばれた男だった。

12月の日記・その4≠『隠者 対 運命』

12月†日

闇の書の話があった後、これからも遠くから眺める事になった。あの夜、おじさんが誰かに連絡しても仮面の人については教えてくれなかった。ただ「言いたいことを言っただけ」ってしか答えてくれない。ただ変わったことと言えばシアちゃんがおじさんと模擬戦したりはんちゃんが専用の武器を作るようになった。シアちゃんとはもかく、はんちゃんが闇の書の主捜しを止めたのは今後からは魔導師と戦うかもしれないから武装を手にしただって。リンカーコアないはんちゃんがと思うだろうけどこの前の『空耳』を作ったときから考えていたって。それに欲しいのは魔力を扱うデバイスじゃなくて魔法に対応できる機能を持った物が欲しいからだって。と言うかこの話に關してはヴェヌスと前々から相談してたらしいよ。こっそり僕から離れて相談してたそうだけど、まあ別にいいけどね。

それではんちゃんの装備は外部からの魔力、カードリッジシステムを参考することになった。元々、保有魔力が少ないベルカの人達の欠点を克服する為に考えられたらしいから合ってたかもね。でも魔力のないはんちゃんはそのままじゃ使えないから改良するよ。形は弾丸じゃなくてガソリンタンクや電池。継続的に出来る考え方だ。そんな事を願ったらあっさり設計図が出来たよ。

12月†日

あれから何日経ったかな？ 中旬も終わりだし、クリスマスも近くなったね。僕は特に変わらないけどはんちゃんとシアちゃんは成長したと思う。

はんちゃんは『空耳』以外に作ったのは三つ。バリアジャケットの『影無』、見た目忍者のような衣装。空を飛ぶための『欠翼』、衣装に合わせた片足ブーツ。そして武器になる『流れ者』、忍刀。こっさてこの忍者スタイルだった。ちなみに魔力を溜めて使用する機能はフュウリアルシステムって名付けた。フュウリアルは英語で燃料つ

て意味だよ。制限時間はあるけど僕が願ったのははんちゃんが戦えるようにって願ったせいか一つに付き3時間持つ上に交換用もいくつも作ったから凄く長い。設計図の焼却と解析防止措置が施されま
した。

シアちゃんはおじさんとの模擬戦でかなり強くなった、らしい。戦いなんて経験がないからおじさんの評価で聞いた限りだけど。シアちゃんのデバイス『フォーチュンドロップ』はおじさんと似ていて複数のデバイスを収めたデバイス。スタイルに合わせて変えるオールマイティ型。広い視野と判断力が培われたって。むしろリーダー向けらしいよ。

そんな2人を余所に僕だけはいつも通りだ。魔力がまた増えたけど。

12月▽日

なんかフェイトちゃんも魔力を蒐集されたらしいよ。はんちゃんが様子を見に行ったらフェイトちゃんがいなかったからそう予想しただけだけどシアちゃんももの凄く慌ててった。そのまま突撃しそうだったけどはんちゃんが止めたよ。できたてホヤホヤの装備で。ああ名前があつたね。魔力を持たない人のためのデバイスだから『ミリティアデバイス』て名付けた。はんちゃんはカタカナが苦手だからけどわざわざ漢字で名付けるのも変だからね。そんなはんちゃんと、我慢の代わりに模擬戦を申し込んだシアちゃんの戦いになった。僕は結界担当でそれを眺めた。

|||||

12月▽日

ここは元々、阪奈が忍者の修行に使っていた場所。今ではアリシアが魔法の練習をする場所にもなっている。そして今日はその中でも派手。阪奈とアリシアが空で戦っていた。

「シュート!!」

「ハッ!!」

二丁拳銃型のフォーチュンドロップ・No. 2 『ラッキーシューター』の魔法弾が放たれるも阪奈は同じく魔力で編み上げたクナイで迎撃する。その際の衝撃で2人は距離を取る。アリシアはクルリと回り、阪奈は地面があるかのように滑りながら。

「なかなかやるね阪奈」

「アリシア殿もでござる」

「もう、呼び捨てでいいのに」

「ではアリシア、と」

なし崩しの模擬戦であったが2人は楽しそうに笑っていた。

「……フォーチュンドロップ、No. 7 『ハリセンスマッシュ』!」

【No. 2, Receive. No. 7, Eject】

そしてアリシアの二丁拳銃は本体であるフォーチュンドロップに吸い込まれ、次に別の武器——ハリセンが出現した。

「行つくよーっ!」

「受けて立つでござる!」

見た目はともかく近接武器としてはしっかりているハリセンスマッシュを握って突撃。対して阪奈は彼女しか扱っていない、魔力ゼロでも魔法を使用可能とするフューーアルシステム搭載の忍刀型ミリティアデバイス、流れ者を構えて迎え撃つ。

「バッターヒット!!」

「なんの!!」

ハリセンスマッシュと流れ者が剣戟に似た音を立てる。大振りのアリシアに対して阪奈は細かな動きで受け流す。一見、阪奈が隙を狙えるような感じに見えるがアリシアは大振りだからこそその隙が出ないように勢いを殺さず踊るように攻め立てる。

「ここでえ〜——」

「ぬっ!?!」

「大逆転ホームランツ!!」

すると勢いが最大になったアリシアから一番の一振りが阪奈に叩き込まれる。しかも計算された、受け流せない場所からの一撃。阪奈

は流れ者で受け止めたがその重い一撃に後ろへと打ち出される。

「まだまだー!」

それをアリシアは追う。ノースリーブでミニスカと冬場では寒い格好だがそこは魔法の技術で問題ない。そして飛ぶアリシアは速い。そこは妹と同じでスピードはあつたようだ。

「させぬでござるー!」

しかし阪奈も簡単には追いつかせない。クナイと同じように、魔力で編み上げた小道具を出現させる。今度のは縄で縛られた弾。

「忍法・煙玉!」

意外にそのまんまである阪奈の魔法名。しかしそれでも効果は確実だ。

すぐ目の前で投げた煙玉はすぐに爆発して広範囲に煙幕を張る。勢いを付けていたアリシアはそのまま煙幕の中に入り込んでしまう。

「やっちゃった!」

第一声はそれであり、すぐにその場に止まって360。全体を警戒する。阪奈の本領発揮するのはこう言った場面。奇襲・夜襲はお手の元と言う信頼。

「——つとあつ!!」

唐突として唸り、ハリセンスマッシュを振るとそこから音が鳴った。

「脱出!!」

その音は気にせず、アリシアはすぐに反対の方向へ飛ぶ。そして煙幕は薄くなり脱出しようと、して待ち構えていた阪奈に出迎えられる。

「なんで!」

「忍者でござるからな!!」

アリシアの疑問を瞬時に理解して答える阪奈。啞えて流れ者の一刀も付け足して。

「あぶつ、ないっ!!」

そんな悪態を吐きつつもギリギリでその一刀を避けるアリシア。しかしギリギリは皮ギリギリであり、バリアジャケットには確かな切

り傷は出来ていた。

「もうっ！ どうやって反対側に出てくるの!？」

「忍者でござるから」

「阪奈もうちよつと捻ってよ！ それはそれで納得だけどっ！」

ぷんすかと可愛く抗議するアリシアをドヤ顔で返す阪奈。そんな2人だがすぐにデバイスを構える。

「でも負けないよー！」

「拙者もでござるよ」

2人は始終、楽しそうに模擬戦を行った。

そんな彼女たちを観戦していた天吹とヴェヌスはと言うと、

「楽しそう」

「参加してはダメですよ」

「なんで？」

「軽くでも十もの魔法を同時に放てるマスターが相手するとすぐに終わってしまいますから」

天吹の規格外っぷりが声に漏れたが特に問題はなかった。

12月の日記・23日≠『見つめる先は・前』

12月23日

ここ最近は何事もなく、なのはちゃんや守護騎士さん達も地球で戦う事がない。そもそもリンカーコアを持つてる魔導師はそういないし、魔法生物が全くいないから仕方が無いかもしれないけど。そうなのとはんちゃんとシアちゃんの模擬戦が一番新しい記憶かな。結局、引き分けで終わったんだよね。そんな2人を背負って帰りました。

それはそれとして明日はクリスマス・イブでその次の日はクリスマスだ。こんな状況でもシアちゃんはクリスマスパーティーの準備に余念が無い。と言っても僕もおじさんも派手なのは好きじゃないからクリスマスツリーの飾りと二段ケーキやらチキンなんかの確保を頑張ってる。ちゃんと僕とおじさんも手伝ったよ。そして僕もプレゼント交換用のプレゼントを用意しておく。いつもならはんちゃんに上げるけどシアちゃんもいて3人になるからちゃんと考えた。クッキーやチョコレートは美味しいけど今年は色々あった年だから置物がいいと思って、ちょっと高いけどガラスで出来た花の置物を買った。女の子でも受けそうだし万が一に僕に当たっても大丈夫そうだったし。

あれ？ これってフラグかな？

|||||

12月24日

終業式が終わった3人はいったん家に帰って鞆を置いて防寒着を改めてクリスマス・イブの街を歩いていた。ただそれだけだった。

「ん？」

異変に気付いたのは天吹。阪奈とアリシアがサンタの服について議論している所を離れて眺めていた所だった。

「(マスターツ!!)」

その異変をヴェヌスが後押しした事で天吹は飛ぶよう駆けて2人の手を握った。

「へ?」

「ぬ?」

突然の事に2人から声が漏れたが気にせず天吹は隠して、と願う。それを叶えるべくヴェヌスは術式を組み上げて発動させる。

その直後、3人を残して誰もいなくなった。

「えっ! 結界!」

『はい。アリシアを取り込もうとしたので捕捉されないように隠蔽魔法を発動しています。ただマスターの手を放したら見付かりますので決してしないように』

「私? なんで!」

「落ち着くでござる。状況はよくないようござるからな」
「え?」

手を繋いだままの3人が見上げた先には闇のような魔力が漂っていた。それは子供ながらも悪寒を感じるほどに。

「まずは離れるでござる。各自、装いを。——変身」

「わかった。——ミラクルチェンジ!」

「えっと」

【緊急事態と判断。バリアジャケットを発動します】

3人はそれぞれ起動トリガーとなる言葉が発せられるとバリアジャケットの装いへと変わる。

阪奈、アリシアは魔法の練習でよく身に纏っていたが天吹は今回が初めてであった。

深い藍色——まるでジュエルシードと色合いを合わせたローブ。宗教的な刺繍が控えめにあり、そう動くことは考慮されていない。ただそれよりも目立つのは両目を覆ったアイマスク。こっちは黒で染まっているが真ん中にはジュエルシードを模した刺繍とそれを映えさせるデザインである。両目を覆っているが、視覚を遮っている訳ではない。そしてアイマスクは激しい移動で露わにあることを懸念した阪奈の意見を取り入れた結果だった。

「おおっ」

「感心するのは後でござる。拙者が先導する故、2人は離さず付いてくるでござる」

「うん、わかった」

急かすように阪奈が先に飛行する。手を繋がれたままだった3人は引つ張られるようにして移動を始めた。あの闇のような魔力から離れるように、しかし上へ上へと上昇していき遮る壁が少なくなっていく。そう誘導しているのはリーダー役のように振る舞ってきた阪奈だから他の2人も素直に引つ張られているのだが。

そうして3人は他より高く聳えるビルの屋上で着陸した。

「ここなら大丈夫でござろう。天吹殿、遠視を映しだして欲しいでござる。場所は、恐らくあそこでござる」

「うん、わかった。ヴェヌス、2人に隠蔽魔法を掛けておいて」

【承知しました】

天吹の両手からリング状の物が出現し、そのまま手が繋がれたままの2人へ移動していく。彼女たちの体を通ると光に覆われるように輝き、そのまま全身を包み込む。それを見届けた後で天吹は手を放し、そのまま両手を挙げる。

「見せて」

短く告げると3人の前に画面が出現する。大きな画面には空を飛ぶ少女達の姿があり、そこにはなのはたちと銀髪の女性がいた。

「高町なのはちゃんだ」

「フェイト！ アルフも！」

「ユーノ・スクライアもいるでござるな。しかし銀髪の婦人はともかく、相對していた守護騎士達がいなくてござる」

映し出された彼女たちを見てその名前が口にされるが、阪奈が言うとおりの銀髪の女性は3人が知らない相手であり、そして対峙していたはずの守護騎士たちの姿がない。

いまいち状況がわからずにいる3人。するとここで天吹の中からヴェヌスが出現する。

「ヴェヌス？」

「あの女性、おそらくは闇の書の管理プログラムかと思われます。映像を映し出す際にスキャンした所、古代ベルカ式の魔力パターンを認識しました。そして膨大なまでの魔力がある反面、それが暴走しそうに制御が乱れています」

「じゃあ完成したんだね」

ヴェヌスであれば間違いはないだろうと天吹は信じる。そうなれば、今はこの場合は破滅のカウントダウンが近づいていると言う事である。その事実を認識し、真つ先に次の手を導き出したのは阪奈だった。

「ヴェヌス殿、ここから闇の書を細かく精査できるとござるか？」

「可能です。その理由は？」

「拙者達の立ち位置は傍観。天吹殿がいる事で高町なのはたちを含む管理局との接触は遠ざけていたからでござる。しかしこの状況であれば接触しても致し方ないでござる」

「えっ、じゃあフェイトを助けにいったいいい!？」

「却下でござる」

「なんで!？」

妹とようやく会えると思ったアリシアを阪奈は一刀両断する。

「アリシアを会わせるのはさすがに刺激が強すぎるでござろう。それに接触するはあくまで『これ以上の悪化を阻止する』場合でござる。今はまだ早いでござる」

「ん〜、でもっ!」

「——アリシア」

理由はわかるが、それでも気持ちを抑えられないアリシア。しかし阪奈に改めて名前と呼ばれるとその熱は徐々に下がる。

「私だって貴女に身勝手なことで寂しい思いをさせているのはよくわかってる。そしてそうさせてるのが天吹の為だって理解してくれてるから感謝だつてしてる。でもお願い、まだ待つて欲しいの」

アリシアを呼んで抑えたときから阪奈は標準の言葉を使っていた。それはつまり本気である事。だからアリシアも熱を押さえ込めたのだ。

「それに私、あの子達のご事は信頼してるの」

「フェイトや、なのはちゃんのことを？」

「ええ。あれだけ芯の通った子たちならなんとか出来るかも知れない。そんな信頼がね」

実際、少ないながらものはとフェイトを見てきたのは阪奈だろう。そして忍者として少ない情報から人となりを観る力もある。その阪奈がそう断言した。

それを聞いてもアリシアはまだ飛び出した気持ちを抑えきれない。だから阪奈の言葉

反芻する。彼女は天吹の事以外にも彼女たちのことを信頼しているからすぐには助けないと言った。なら自分は？ 何を理由に足を留まらせるか？ だったら、一緒でもいいじゃないかな、と。

「心配だけど、私も信じるよ。フェイトなら乗り越えるって」

「ありがとう。ごめんね、無理矢理納得させたようで」

「じゃあクリスマスケーキの一切れ譲ってね」

「高く付いたわね……」

実は阪奈は和菓子より洋菓子が好みであった。

「終わった？」

「ああうん。——話はまとまったでござるよ。かの闇の書の者の精査、始めてくれでござる」

「うん。じゃあ守ってね。シアちゃんもお願い」

「もちろんでござる」

「頑張ってね天吹くん」

2人がデバイスを手に持つのを確認すると天吹の視線は闇の書の管理プログラムを捉える。

以前、効果を継続させるには天吹自身が願ひ続ける事が必要だと言われていた。必要だと思われる物を願えばすぐに得られるが、その場合は天吹が願った分しか得られない。今回はその、天吹自身が気付きようのない物を得るために願ひ続ける。しかしその場合、無防備になるため阪奈とアリシアが護衛として備える。特に戦いの余波が来た際、天吹を引っ張って脱出させる要員が。

「貴女の奥底、見せてもらいます」

【――承認、実行します】

自分の安全、いやヴェヌスが天吹の安全が確保されたと判断して行動に移す。

遠くで戦うなのはたちの影で、天吹たちが深い場所を見始める。

――まるで海を潜っていくみたいだ。

天吹の意識は彼がそう思うように、沈むようにならゆる情報が周囲を通り過ぎていく。闇の書が過ぎ去った記憶。そして闇の書の魔法と蒐集した魔法とそれらを扱う魔導師の情報。この時点でその量は膨大。通常であれば処理が追いつかずパンクするそれらを天吹はレコード・オブ・アルハザードの機能で処理していく。

――八神、はやてちゃん。

それは闇の書の主であるはやての事も読み取ることとなった。しかも今彼女は闇の書に取り込まれている事から彼女の記憶も断片的に読み取った。ロストログアに選ばれたこと。守護騎士と楽しく過ごした事。幼い頃に両親を失ったこと。

――似てる。

境遇が自分に近いと天吹は思った。でも、自分と彼女は明らかに違う。似て非なる、そんな物。彼女は幸せを手に入れようとした。自分は、前を見ている。その違い。

そんな感傷をして天吹は更に闇の書の奥を覗いていく。深くなるにつれて空白の部分や殺伐とした記憶を読み取っていく。おそらくは過去の記録。断片となった記録や改悪の跡であるが、その経緯を知らない天吹はただ読み取るだけだった。

そうして辿り着いたのは、闇の書の闇。これが原因かもしれないと

注視する。あまりにも乱れたプログラムだったがそれでも読み取っていく。

あまりにも無残で、悪質で、救いようがない。多くがそう表するほどの闇の書の闇を、天吹きは、

——ああ。

憐れんだ。故に彼は、この闇に関心を向けた。

12月の日記・他筆 ≠ 『見つめる先は・後』

※日記帳の見返しに書かれた手記

人の願しあわせいとは何か？

この世の中で人が人らしい幸福を得られる、なんて事は多くもなければ少なくともない。何が幸せで何が不幸なのかは、誰に定められない。いや、「これ」だと定める事は決してはいけないのかもしれない。

挑戦と逃避。希望と絶望。正と負と別れながら人にとって心安まるのはそのどちらか。故に、「これ」という幸せは定められないだろう。

であればそれを見逃すか？

しかし世の中、そんな勝手に流れてしまう事がないのが複雑な所だ。

誰だって受け入れられない物だってある。親のしつけ、友達の趣味、同僚の価値観。それらは衝突し不和を呼ぶ。それから仲を戻すか壊すか当人達次第だ。流れに身を任せて幸せにも不幸にも、流れに逆らって幸せにも不幸にも、どちらに転び正しかったなど言えるわけではない。

ならばどうすればいい？

そんな不安を抱えるのは誰にでもある。そして答えは「知らない」だ。後悔しない選択をすればいいと言うが、それで納得出来るかなど難しい。未練だって残る。だから、幸せとは何かとは定められないだろう。

それでももし、数々の困難と理不尽の先に幸せが手に入ったのなら

ら、

人はそれを、『奇跡』を呼ぶのだろう。それが例え神デウス・エクス・マキナの気まぐれであろうと。

2005 / 12 / 25 by V e n u s^{ヴェヌス}

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

12月24日

戦いは一方的であった。闇の書はとてつもなく強大でなのは達の手は遠く及ばない。魔法は効かず、逆に蒐集された自分達の魔法を返される始末。抵抗は出来ても決定的は一撃はなく、アクシデントも加わり戦力は減る。

ユーノとアルフは巻き込まれた2人の少女を守るため、フエイトは闇の書の内部空間に閉じ込められて残ったのは高町なのは。しかし不屈の心持つ彼女は諦めない。1人でも立ち向かう。そして諦めていない少女はまだ2人いる。穏やかな夢に身を委ねることなく現実と向き合う。

諦めない。それがこの未来をつかみ取った。

戦場が海上へと移動した際に、天吹たちも離れすぎないように追い掛けた。闇の書の崩壊が始まっていたので所々には火柱が立ち上り、その内の1つに危うく巻き込まれそうになったがなんとか回避した。この時、天吹は未だに闇の書のスキャン作業をしていたために阪奈に運ばれる形で移動した。

そうした仲、状況は一時的にだが静寂した。闇の書の防衛プログラムが切り離されて八神はやたと守護騎士達が現れた頃、天吹たちの所にも合流する者がいた。

「やつと会えたよ。まったく、この冬はどうも危険な場所にいるねえ君たちは」

結界の捕縛から逃れていた忠が現れた。複数のデバイスはもちろん、今回はしっかりとバリアジャケット纏つての登場だ。この場面での合流になったのは結界を抜けるのに時間が掛かったことと居場所を探すのに管理局員と鉢合わせないように遠回りしたからである。

「すみませんでござる忠殿」

「いや気にしてないよ。私もこの場面に立ち会えるのは思う所があつてね」

「……確か縁がある、でござつたな。聞いてもよろしいでござるか?」
「1年前、ライバルであり親友のような男が殉職したのさ。傭兵と管理局員の関係なんてドラマみたいだろう?」

笑いながら、そう告げた。そしてなぜ管理局のデータベースをハッキングした理由も察した。

「えっと、忠さん。もしかして——」

「復讐、なんて思つてないさ」

思わずアリシアから零れた言葉に忠は否定した。

「あいつは管理局員として職務に殉じたはずだ。多くの犠牲を出してたまるか。なら残された私たちは無念を飲み込んで犠牲や被害を出さない未来を掴む努力をしよう。まあ傭兵家業もそこそ洗つた程度の私が言えた事でもないだろうがね」

「つまり、以前の電話はその犠牲を出そうとしていた者がたのでござるな」

「まあね。もつとも向こうが年上で立場もある相手だったからね。何をやってるんだ? 程度の苦情だよ。それが効いたかわからないが、少なくともそう言った手段は取らなかつたみたいだね」

忠が見つめる先には守護騎士に囲まれた少女、八神はやて。状況から彼女が闇の書の主だと察していた。その姿、彼女と守護騎士達が家族のように見える光景から今のところいい流れであると思う。

「さて、具体的な状況を聞いていいかな?」

「うん。天吹くんが言うには闇の書から防衛プログラムが切り離され

た所だつて。あのでっかいドームがそれ」

「あれをどうにかしない限りは破滅の未知でござるな」

「逆に言えばなんとか出来れば綺麗にまとまりそうだねえ」

破滅とも呼べる危機が遠くから迫っているというのに恐怖に怯える様子がない。もつとも、それはいざという時の存在がいる故かもしれない。

そう傍観している間に状況が動き始めた。なのは達も何か手を思いついたようで配置のように別れている。

「始まる」

天吹が呟くと空気が振るえ始めた。

—— 忠は友を奪った物の行く末を見守り。

—— アリシアは妹フェイトと彼女の友達の勝利を祈り。

—— 阪奈は無事に事を終わることを期待し。

—— 天吹はヴェヌスト、闇の書の闇をジツと見つめていた。

海上で闇の書の闇がそのキメラと呼ぶべき複合生物の姿で出現した後、なのはたちは動いた。巨大で強大な敵。しかし彼女たちは怯える事なく立ち向かう。いや、その光景は一方的だった。闇の書の闇が纏っていた防御を一層、一層を強力な魔法で打ち破る。それらを取り払ってからの石化魔法や凍結魔法。そしてトドメのなのは・フェイト・はやての砲撃魔法が、その巨体を消滅させた。そして、闇の書の闇のリンカーコアは天高く、宇宙へと打ち上げられた。完全に消滅させる為に。

天吹が空を見上げた事で3人もまた天を見上げる。

「そうか、アルカンシエルを宇宙空間で放つのか」

「アルカンシエル？」

「管理局が保有する艦船の、最上になる魔導砲だよ。着弾すると空間

歪曲と反応消滅を起こして対象を中心に百数十キロを完全殲滅する代物さ」

「それは、ここじゃ撃てないね」

「でも今回は全てが揃っていたんだ。闇の書の闇の防御を貫く事。転送する為リンカーコアを抽出する方法。はは、奇跡だねえ」

そう、ここまで揃うことすら奇跡なのだ。エース級の魔導師が同じ場所に揃うことなど、前から準備していなければあり得ないのだ。次元を超えて世界を管理する管理局は保有戦力に制限があることを知る忠だからそんな言葉を口にするのだ。そんな事を離しているが誰も空から目を離さない。だから、天吹の様子に気付かなかった。

そして、天高くから輝く光が灯った。

「——終わったね」

そう告げたのは忠だった。友を奪った力の消滅にしてはあっさりとした言葉だった。視線を下げ管理局員に見付かる前に逃走しようと告げようとして、両手を挙げる天吹に気付いた。

「天吹？」

何をしているのと思いをかけた。まるで夜空の星を掴もうとしているかのようで——。

「取った」

すると天吹は唐突にパンツ、と両手を閉じてそのまま胸元の所まで下ろした。

「何を——」

「無限再生機能、一時凍結。次に全プログラムの把握開始。同時に隠蔽魔法をサークルタイプで展開」

【承認。実行します】

無限再生機能。天吹は確かにそう言った。つまり、天吹が手に納めたのは闇。

「天吹ッ!？」

「天吹くん!？」

飯菜とアリシアも何を捕まえたのか察してすぐに彼に近づこうとすると天吹の両手の中から隙間を縫って触手のような物が出現する。

彼の手を傷つけ、更には両腕に触手の先端が突き刺さる。

「っー」

「ひっ!？」

思わず足が止まる2人。アリシアは出血に驚いてだが阪奈は下手に触れては余計に天吹を傷つけてしまうと予感したから。忠も阪菜と同じ考えに至り、伸ばした手が停止した。

「……処理速度が足りない。ヴェヌス、本体で出てきて」

しかし当の天吹は表情を変える事なく淡々としており、加えて傷付けられながらもヴェヌスに追加の願いを口にする。そうして体の中から出てくるのはヴェヌスの本体、レコード・オブ・アルハザードである結晶の花。

【31%……、53%……、88%……】

その花から聞こえてくる声も主と同じく淡々と主の願いを叶えるべく処理作業を実行し続ける。

【94%……、100%。闇の書の闇、正式識別名称『ナハトヴァール』の構築プログラム完全把握。モニターにて表示、リンクします】

天吹の周囲にいくつもの画面が出現する。そのどれも文字列と図形であるこれら全ては闇の書の闇をプログラムとして表した物。

「無限再生機能と自動迎撃機能の削除」

【承認。削除^{デリート}】

天吹の言葉に従い、ヴェヌスは2つの画面に映った情報を消去し、画面を閉じる。すると天吹の両腕を傷つけていた触手が力なくなったらんと垂れ下がる。

「生体部品を最適化。余分な物は削除して」

【承認。生体構築情報を確認。大型魔法生物情報、削除^{デリート}。残り54件。中型魔法生物情報、削除^{デリート}。残り18件。攻撃的魔法生物情報、削除^{デリート}。残り4件。危険性消失により、残った情報より生体情報を再構築】

今度は1つの画面の文字列が段階的に減っていき、そして必要な情報だけを残して背景の色が変化する。同時に垂れ下がっていた触手も消滅する。

ここまでの作業を終えて天吹は閉じた両手を開いた。そこから出

現したのは真つ黒なリンカーコア。しかし状態はとても弱々しい。

「——きみは憐れだった」

天吹はそんなリンカーコアに言葉を投げた。しかしそれは他の3人あることを気付かせた。彼の、厄介な部分が出てきていると。

「改造されて主や守護騎士たちを苦しめた。でもキミはただ本能に従っただけだった。善悪なんてなくて、防衛を任された存在として、赴くままに行動した。手の付けられない獣だった。だから憐れだ。喜びも悲しみも感じなかったから、憐れだ」

でも、と天吹は繋げる。

「だからこそキミには感情を持つべきだ。僕と違って、キミは持つことが出来る筈だよ。だから、キミを救い上げるよナハトヴァール」

【生体情報の再構築完了。生体部品を形成します】

ヴェヌスの言葉と同時にリンカーコア、闇の書の闇が強い反応をする。リンカーコアを覆うように外殻が魔力で構築されていく。それは黒いリンカーコアに反して白い外側。それが生物の形を作り上げていく。

ここにもう一つの奇跡が起こる。

【……生体部品の形成終了】

ヴェヌスが宣言すると闇の書の闇は、小さな生物へと生まれ変わった。

キツネに似ているが二尾の上に有角、背中には小さな羽が付いている。地球にはまずいない生物だった。それはゆっくりと天吹の手の平に降りる。

「(……パチツ)」

目を開け、天吹と視線を合わせる。そのまましばらく見つめ合い、そして何か通じたのかそのまま腕をつたって肩に移動する。

【お疲れ様ですマスター】

「うん。ヴェヌスも戻っていいよ」

【はい】

そしてヴェヌス本体のレコード・オブ・アルハザードは天吹の体に戻っていく。ここまでやって、天吹は3人に告げる。

「……飼うからよろしく」
沈黙。そして、

「天吹（くん）のばか——
ツツツツ——
!!!!!!」

盛大に阪奈とアリシアに怒鳴られてしまった。忠もさすがに擁護
出来なく、口元が引きつっていたそうなの。

12月の日記・ 聖夜 ≠ 『花を咲かせただけ』

12月24日

ナハトヴァールことなはとを飼える事になった。

はんちゃんとシアちゃんが怒ってたのは僕が怪我までした事に対してだった。無茶しないでとか、せめて一言言ってほしいとか、泣きながら怒ってた2人だった。でもそこにおじさんが管理局に見付かる前に逃げ出すように言ってくれてすぐに逃亡した。家に帰ったら両腕を応急処置した後でまた怒られ続けた。ちなみに今は魔法で鉛筆を動かして日記を書いているよ。

ともあれなはとの事だ。闇の書の闇で正式にはナハトヴァール。生まれ変わったような物だから名前は『なはと』。もう防衛プログラムの力はなくて今はただのキツネモドキでしかない。あと再構築にちよつと失敗したのか鳴くことがない。近所迷惑にならなくていいけど。おじさんはちよつと考えてみたいけど『一度は消滅したからいいよ』と納得してくれた。シアちゃんはなはとの可愛いが意見にすぐにOKだった。はんちゃんは戦闘力がないから問題ないって。

そんな感じに今日は色々あったよ。クリスマスパーティーは明日にしてよかったね。ケーキの受け取りとかあるしね。明日は何事も無いといいな。

あつ、またフラグ立てたかな？

12月25日

今日は予定通りクリスマスパーティーで盛り上がった。朝方はちよつと疲れたけどそれが吹き飛んだように楽しんだ。ケーキを頬張るシアちゃんを前にすごく悔しそうなのはんちゃんとか、気に入ったのか冷蔵庫にあった油揚げを食べるなはととか。色んな事があったけど今日パーティー出来てよかったよ。でもやっぱり疲れたから日記はこのくらいにしようか。

パーティー以外に今日もまたはんちゃんとシアちゃんに怒られちゃったしね。いいかなって思ったけど、黙ってなのはちゃんたちの

所に行つたのはダメだったみたいだね。
追記

気にしないでよろしいですよマスター。

By Venus

|||||

12月25日

「……キツツキ」

目覚める直前、突かれる夢を見えた気がする天吹はそんな一言を呟いた。でも突かれる感触は残っており、そこに顔を向けてみればなはとが角で突いていた。

「どうしたの?」

「(ンツ、ンツ)」

なはとは鳴けませんが、様子から何か焦っているようだった。

「……ん」

伝えたことがあるのだと悟り、天吹はなはとの顔に手を添えて思考を読む。

なはとの思考に感情と呼べる物はまだ未熟だ。しかし、防衛プログラムの機能を失いながらも本能は残ったままだ。そしてその本能とは主と闇の書を守る事。

「……止めに行こう」

そう言つて天吹は体を起こしてベッドから降りるとすぐにクロゼットへ向かう。そしてなはとの願いを聞き届けよう。

管理プログラムを救つてと言う願いを。

天吹はなはとから暴走していた機能を全て取り払うことが出来たが繋がりが完全に消えたわけではない。なはとからの一方通行だが管理プログラムへのリンクは残ったままであり、後日それを取り払う予定だった。しかし今回はそのおかげで管理プログラムの自己破壊

を察する事が出来た。

曰く、なはと自身は分離されたが闇の書本体はまだ歪んでおり、その歪みから新たに防衛プログラムを再生されてしまうそうだ。つまりなはとは別に新たなナハトヴァールが復活してしまうから自己破壊を望んでいるという。これまで思考することがなかったなはとはそれが実行に移されようとした所で察知したのだ。

防寒着を纏った天吹は首の裏側になはとを潜ませて管理プログラムのいる場所に1人で向かう。急いだために誰にも伝えず、両腕の怪我也雪の寒さで痛むがその足取りはスムーズだった。

「ヴェヌス、どうやったら救える?」

『そうですね。かつての姿である夜天の書の形に戻すことが理想でしょうが、そうなるかと人格や記憶も失うでしょう。願うならと言うなら、今の管理プログラムが残る形に』

「そう願えばいいんだね?」

『はい』

「(トントントツ)」

首の裏に潜むなはとが叩いて急がせながらも手順を確認する。しかし彼は考えていない。管理プログラムに向かうと言う事は十中八九、なのはたちもいると言う事。でもそれ以上に、救ったなはとが最初に覚える感情が『哀しい』は寂しいから、と。

「(――マスター、止まって下さい)」

するとヴェヌスが急にそんなことを言い、天吹は素直に足を止めた。急いでるのにと思ったがもうちよつと進んだ先、十字路の角から誰かが出てきた。

「あつ」

「え?」

天吹はその少女を知っていた。名前は、八神はやて。しかし簡単な上着を着て車いすを必死に進ませている姿は見てわかる通り急いでいた。

「キミは……、そや。キミツ、あそこまで押して言ってくれへんか!」
彼女は早朝で誰もいない中、同じ年ぐらいの天吹と遭遇してそんな

事を頼んだ。そんな彼女が指し示す場所は天吹も向かっていた場所であった。

「……急いでる?」

「うんっ、大事な、大事な家族の為なんやっ!」

それを聞いて彼女もまた管理プログラムを救おうとしてると知った。隠れているなはとはどう思っているか。少なくともさつきまで急かせて叩くのが止まっていた。

「いいよ」

「っ! ありがとう……っ!」

涙ぐみながら感謝の言葉を呟くはやて。天吹は返事せずすぐ彼女の後ろに回って車いすを押し始めた。

その後ははやて1人よりは速く、天吹1人よりは遅い速度で向かう。この後は誰とも遭遇しなかったが通行の邪魔になる物もないまま進んでいく。そうしてあとは上へ登っていく所まで辿り着いた。

「ここまででええ!」

「わかった」

そう言われて天吹が手を離すとはやては自分の力で車いすを動かして登っていく。そんな彼女を、見送りながら天吹は一度なはとに尋ねる。

「今さらだけど、なはとが出たら攻撃されるかもね。大丈夫?」

「(トンッ)」

『大丈夫、だそうです』

「じゃあ行こうか」

天吹も追い掛けるように登っていく。この後は間違いなく厄介事になってうというのに、彼は迷わず進む。

邂逅まで、もうすぐ――。

本当に心優しい主だと、リインフォースは思った。まだ存分に動かない体でここまで来て、私に生きてくれと訴える。そんな主に涙を流せて胸の奥が痛むが、それでもこれが最善だ。守護騎士たちも残る。

自分を止めてくれた心優し少女達がいる。そして消滅したあと、私の名を継いでくれる魔導書も現れる。心残りはない。

「リイン、フォース……」

「はい、我が主」

主はやて。どうか幸せに――。

「ふぐっ！」

はやてに遅れて登ると見えたのははやてと管理プログラムの女性。しかもなのはとフェイト、守護騎士も勢揃いだ。

「まあいつか」

しかし天吹は気にしなかった。今ははやてと管理プログラムの2人に注目して気付かれていないが、あと少し近づけば気付かれそう。その当たりで管理プログラムが立ち上がるようにする。

「なはとGO」

『(フンスッ!)』

何を思ったのか、突撃を指示すると潜んでいたなはとが飛び出し、そのまま駆けると管理プログラムの顔に飛び込んだ。

「ふぐっ！」

恐らくこの場の空気を壊すこと間違いなしの声が漏れて管理プログラムは尻餅をついてしまう。

まさかの光景に誰もが呆気に取られる。その隙に天吹は倒れたはやての車いすを起こす。

「よっ」と

「え？ あっ、キミは……」

「雪の上じゃ風邪引くよ」

そう言つて転んだはやての体を抱えて車いすに座らせる。

「なっ、何がっ」

そして尻餅をついた管理プログラム、リインフォースは起き上がった顔に張り付いたなはと離し、言葉を失った。

「リインフォース？」

突如として凍り付いたりインフォースにはやては首を傾げる。そんな彼女と入れ替わるように天吹が近づく。

「はい。戻っておいで」

「(コクツ)」

腕を伸ばし、なはとはそれに飛び移ってそのまま頭の上に居座った。

「まつ、待て！ どういう事だ!？」

「ん？ 見たとおり？」

「そういう事じゃない！ キミの頭にいるそれは、その子は……」

「そうだよ。闇の書の闇、ナハトヴァールだよ」

「えっ?」

あつさり告げられたその名前に皆が驚く。しかし天吹の耳に届いたのはそばにいたはやての声だけ。

「でも、いや、しかし……」

そしてこの場にいる誰よりも信じられないインフォース。あの防衛プログラムと呼ぶにはあまりにも小さく弱々しい。しかし管理プログラムとしての彼女が告げる。これは間違いなく闇の書の闇だと。

「安心して。自動再生機能と自動迎撃機能はもうないし、変な生物にはならないよ。ただ、この子がいても貴女の機能が別の闇の書の出できちやう。そうでしょ?」

「あ、ああ……」

「だから」

天吹は未だ動揺するリインフォースの手を握る。これで、準備は出来た。

「貴女も家族と過ごせますように」

【承認。実行します】

願い、天吹の力が発動する。彼とリインフォース、そしてはやてを中心に魔法陣が出現する。

「えっ、なに!？」

「魔法……?」

「なんだよこれ!？」

唐突に現れた天吹となはと。それに加えて見覚えのない魔法陣が展開されて他が慌て始める。しかしそれを無視してヴェヌスは願いを実行する。

願いの対象となったリインフォース。そんな彼女の意志を無視して闇の書が出現する。

「っ!? なぜっ」

外部の干渉を受け付けられない闇の書が主と自分を無視して出現したことに目を疑った。

【闇の書より管理プログラムの構成情報を把握。これより独立化のため、現在の構築体から再構築します】

今回はヴェヌスの本体も分身も出現せずに音声も響く。そしてリインフォースの体は天吹と繋いだ手から魔力に覆われる。

「っ! リインフォース!!」

「大丈夫」

思わずはやてが声を上げるがそれを天吹が返す。それを証明するかのようにその魔力が覆ったのは一瞬。変わらないリインフォースの姿があった。

【再構築の成功により独立化も完了。管理プログラム、名称『リインフォース』喪失。加えて防衛プログラムも喪失しているため闇の書本体の維持は困難。破損箇所より崩壊を始めます】

そして今度は闇の書は魔力に包まれ、降る雪のように散っていく。しかしその中心で表紙にあった剣十字の紋章だけが残る。

【闇の書、崩壊。以上を持って全行程を終了します】

その言葉を最後に、出現した魔法陣は静かに消え去った。

あまりの出来事に元々あったベルカ式の魔法陣は消え去っていた。しかしそれはもう、必要なかった。

「どう、今の状態は?」

「あ、ああ……」

全てが終わり、天吹はリインフォースに尋ねる。彼女は何が起こったのか、理解していた。そう思うと、彼女の目から涙が溢れる。そし

てその瞳はいつの間にか、光輝いていた。

「どないしたんやリインフォース!？」

「あ、るじ……」

いきなり泣き出したリインフォースにはやてが近づくと、そのまま彼女に抱きしめられる。

「ちよ、ホンマにどうしたん!？」

「すみません主、あんな事を言ってしまったが……。ですが、ですがっ! これからもお側に居させてもよろしいですか……?」

「えっ、それって……」

「闇の書は消えたよ。でもその人は残る事が出来るだけだよ。それとコレ」

リインフォースに変わって天吹が答え、そしてはやてに何かを差し出す。未だ理解出来ないはやては思わず手を出すとその手に剣十字の紋章を渡された。

「なはとはどうする?」

「(ポフツ、ポフツ)」

「もういいの?」

「(コクン)」

「そっか。じゃあ僕はコレで」

用が終わったと言わんばかりに天吹は背を向け、なはともリインフォースをジツと見つめた後に頭から肩へと移る。実際に用が済んだからその行動は彼にとって自然だ。

しかしそれが流れるように通るわけではない。

「待て!」

「ん?」

少し進んだ所で天吹を、シグナムが止めた。振り返れば自分を見ているのは彼女と、ザフィーラの2人。他の4人ははやてとリインフォースを囲んでいる。

「なに?」

「……キミは図書館で会った子か」

「うん」

「そうか。なら聞かせてくれ。キミは何者だ？」

防寒着を着込んでいてすぐには気付かなかったがシグナムは声や雰囲気や天吹が図書館であったあの子供だと確信した。あの時は魔力など感じなかった筈なのに、今はこの誰よりも膨大な魔力を持つて魔法を発動させた。しかもミッド式でもベルカ式でもない、不可解な術式を使って。

ちなみにシグナムを含め、ここに居る全員は気付いていないが管理局に気付かれないよう、隠蔽をして願いを実行していた。つまりここで起きた事を知ってるのはこの場に居る者たちだけであった。

そして天吹はシグナムの問いに、なんて答えようかと考えているとヴェヌスからの声を聞く。

「(マスター。早めに立ち去った方がよろしいかと)」

「(ん、わかった)」

急いだ方がいいと告げられ、同時に転移魔法の準備をしながら天吹はシグナムにこう答える。

「種を育て、花を咲かせただけの子供だよ。——じゃあね」

夏、ヴェヌスがジュエルシードの頃にいつも口にしていた言葉で答えた。そしてそのまま別れの言葉を残して転移魔法を発動させた。

「待——」

シグナムは手を伸ばしたが、その言葉が言い終わる前に天吹は姿を消した。

これにて傍観者は舞台の上へ。アルハザードの力を持つ久保田天吹は魔法世界の表へと現れた。

高町なのはのきっかけとなったジュエルシードを手にした事で始まり、

フェイト・テストロッサの姉アリシアと母プレシアの命を救い、

八神はやてにリインフォースを救う奇跡を与えた。

ここが天吹の始まりとなるのか？ それともこの一舞台で終わるのか。

彼と3人の魔法少女との巡り会いは如何に？

夜天を救う少年
闇の書編、終了。

登場人物紹介（※本編閲覧推奨）

くぼた あまぶき
久保田 天吹

本作の主人公。公立海鳴第三小学校4年生。前髪が両目を隠すほど長く、それに合わせて全体的に髪が長い。おじさんと呼ぶ忠と一軒家で2人暮らし、だったが春にはアリシア、冬にはなはとが加わって賑やかになった。厄介さも上がった。

春に飲み込んでしまったジュエルシードをレコード・オブ・アルハザードへと開花させた事で願ったことは叶えられる万能の力を手にするがあまり使うことがない。いくつもの世界を手にして王になることも可能だが、興味が無いからしない。しかしアリシアの蘇生の際にプレシアに希望を残したり、なはととリインフォースを生き延びさせたり、家族の別れに対しては願いを叶えてあげている。

両親は事故により死別しており、その際には天吹もいた。事故後、五体満足で体に後遺症はなかったが精神はそうでもなく感情が欠落。加えてその両目の奥を覗けば恐怖の感情を抱くと言われるほどに、なはとも言葉に出来ない何かを感じさせるようになった。その為か前髪を伸ばしていたが、それが他人を気遣ってかは不明。

バリアジャケットデザイン

宗教的な刺繍がされた藍色のローブとジュエルシードの刺繍があるアイマスク。

デバイス

ジュエルシード・シリアルナンバーⅢ

ア坎シクレコード・モード
神智意識形態・レコード・オブ・アルハザード

名称『ヴェヌス』

天吹の力の源であり、一体化しているロストロギア。本体は宝石作られたような花だが普段は分身である、古きヨーロッパ系王族の女王様といった感じの小人の姿で過ごす。プレシアが回収していた8個をサブとして取り込み、特に分身では翼のように展開している。

偶然にも落下して天吹の体内に入り、しかし天吹が何も願わなかった事で本来の機能が働き自意識を獲得した唯一のジュエルシード。そのおかげで忘却の底にあった本来の目的のために天吹と運命共同体を提案し、それは受け入れられる。念入りな誘導・隠蔽した行動によりその目的は果たされ、天吹にどんな願いも叶う力をもたらす。当の本人はその力を使おうとしないが、そんな天吹だからこそ開花できたと言語。

基本的には天吹には逆らわず止めもしない。故に天吹が1人走りしても常にサポートする。親バカならぬデバイス馬鹿。それもあつてか阪奈とは犬猿の仲である。

ふじのほんな
藤乃 阪奈

天吹の親友でヒロインその一。同じく公立海鳴第三小学校4年生。ショートカット美少女。忍者口調で男の子が仲良く、しかも女の子に優しいので全体的に人気者。海鳴市ならいてもおかしくない納得の忍者娘。家族は両親と兄2人との5人構成のマジな忍者一家。兄たちは海外に留学（と言う名の裏社会の経験中）で今は3人だが、父親が中学生ぐらいのシヨタなので母・兄・妹と間違われる。2人の兄は成長したがそのしわ寄せが自分に来ないことを実は祈っている。

天吹とは1年生の頃から知っていたが2年生の頃に事故後の彼がいじめに遭いそうになった所を助けようとしたらいじめっ子が怯えるように逃げるのを目撃する。それが気になって声を掛けるとその両目と心の欠落を知る。そんな不安定で危なげで、しかしどこか尊さを残していたカタチに惚れる。それ以降から親友の男の子のように、幼馴染の女の子のように一緒にいるようになる。

忍者口調はキャラ付け。リミッター制限するため、意識の区別を作っている。天吹に宿り、しかも危険な事をする彼を止めないヴェヌスとは犬猿の仲。

バリアジャケットデザイン。

ぱつと見は袖無し半ズボンの暗い色の忍者装束。頭部はバンドナで口元はマフラーで覆っている。足は片方がデバイスなのでもう片方に草履に似た物を履いている。

デバイス

ミリティアデバイス

名称『魔枯^{マカ}』

リンカーコアを持たない阪奈が魔法を使い、魔導師と戦うために天吹がもたらした新設計のデバイス。ガソリンタンクや電池のように魔力を溜める部品を使う『フュウリアルシステム』を搭載。

ミリティアは英語で『民兵』、フュウリアルは英語で『燃料』という意味。

『魔枯』は使用するデバイスの総称であり、個別の名前は以下の通り。

・忍刀型『流れ物』。近接系の魔法を使用。
・忍装束型『影無』。バリアジャケットに相当。防御系と多数の魔法を使用。

・ヘッドフォン型『空耳』。念話などの通信系。

・ブーツ型『欠翼』。飛行などの移動系の魔法を使用。片足分しかない。

アリシア・テストタロツタ

ヒロインその2。フェイトのオ리지ナル^{お姉さん}。公立海鳴第三小学校5年生。だけどよくて3年生にしか見えない。生来の明るさで皆と打ち解け、そして歌がすごく上手いので学校で有名になる。行事イベントでは大いに盛り上げている。

春に起きたジュエルシード事件における重要な鍵の1人。享年5歳だったが天吹により11歳の体で蘇生。11歳まで成長したのはヴェヌス曰く『この年齢であることが正しい』と言う整合性が働いた

結果らしい。同時に母であるプレシアも水晶体に眠るように助けてもらう。それから週に1日、母親の所で過ごしている。そしていつの日かフェイトと胸を張って会える日を待っている。

バリアジャケットデザイン。

とある世界線と同一(※『innocent』のアバター『ラッキースター』そのまま)

デバイス

ストレージデバイス

名称『フォーチュンドロップ』

天吹と忠との3人で作り上げたアリシア専用のデバイス。片手に収まる程のビン型をしており、9つの武器を収納している。詳細は以下の通り(※『innocent』の設定にオリジナルを追加)

- No. 1 二丁拳銃型『ラッキーシューター』
- No. 2 棒付きキャンディー型『キャンディーバー』
- No. 3 マイク型『マイクスター』
- No. 4 ポンポン型『ポンポンフラワー』
- No. 5 青い薔薇のブーケ型『ブルーローズ』
- No. 6 投用手用グローブ型『マジカルグラブ』
- No. 7 ハリセン型『ハリセンスマッシュ』
- No. 8 サポートロイド型『チヴィット・ぷちシア』
- No. 9 ??????

くぼた 忠
久保田 忠

天吹とアリシアの保護者。ミッドチルダ出身の元・傭兵。久保田忠は偽名である。普段は日中で飲食店の雇われ料理人で働いている。が、たまに違う仕事に出て大金を稼いでくる。家の地下室には傭兵時代に使っていた数々のデバイスがある。

傭兵家業の最中、地球で落ち延びた所で天吹の両親命を助けられた事で縁が出来る。回復後はこれ以降の活動は困難になると考え、死を

偽装して足を洗うと新しい名前と顔を持って地球へ移住する。と言っても完全に洗いきつてはいないようであり、たまに稼いでくる大金の出所はここ。アリシアの戸籍もここからのツテ。

地球では穏やかに、時々怪しく充実した日々を過ごしていたが天吹たちの家族が事故に合い、その一人息子だった天吹だけが生き残った事を知らされるとすぐに引き取ることを決める。あまりの変わりようではあったがそれでも天吹は天吹だと以前と同じ扱いで接している。

それからジュエルシード事件、闇の書事件を経て傭兵としての力を振るう予感をしている。

バリアジャケットデザイン。

元は管理局武装隊のバリアジャケット。闇市に流れていたのを購入し、改造している。大きな変化は鎧を外してコートに、頭部にゴーグルを装着している。

デバイス

ストレージデバイス

名称『ファイブアーム』

忠がメイン、十全な戦闘で使う5つのストレージデバイスでシステムは1つにリンクしている。ライフル・杖・ナイフ・ウォーピック・盾。使用しない場合は待機状態となっている。

なはと

天吹くんのペット。癒やし系。元は闇の書の防衛プログラム『ナハトヴァール』。しかし今はその機能の大半を失っており、今はキツネに似た生き物。鳴き声を出せないので行動で意志表示をする。油揚げが大好き。実はラインフォースも大好きで、本当ならいつでも会いたいと思ってる。

見た目通り動物的本能しかなく、喜怒哀楽という物が明確ではな

い。コレは防衛プログラムの時からであり、感情を知らないと憐れに思った天吹により再構築される。聖夜の日から少しずつ闇の書の名残を消去しており、コレが終われば改めて能力を付加する予定である。

なはとにより天吹はなのはたちと初めて出会うことなる。これまで遠かった2つを繋ぐきっかけとなった。

12月の日記・月末≠『彼女たちの語らい』

12月△日

そろそろ年末が近くなってきた。何事もなく年明けが迎えられそう。なんて事はあるけど管理局から見付からないようにも過ごします。

あの出会った日から隠蔽魔法は継続的に使ってる。魔力反応はいつも通り。万が一にすれ違っても顔は認識出来ないように。シアちゃんにも同じのを使ってる。でも僕の意識が別に向いちやうとすぐに解除されたいからその対策を行ったよ。まあなはとなんだけどね。

なはとの闇の書の名残を取り払った後、今度はなはとをどうするかになって、結局は僕を守る為のデバイス兼守護獣になった。守護獣はいつもの姿だけどデバイスだと籠手に棘が出てる感じ。シアちゃん曰く「パイルバンカー!？」って叫んだけどおじさんが「古代ベルカの槍射砲だね」って訂正してた。つまり昔の武器って事。守護獣の状態はいつもの感じにプラスしてイブに夜みたいな多重障壁が張れる。ただ僕の魔力を使ってるせいであの日より頑丈。デバイスはガチンコスタイル。でも僕は戦いません。作り直した防衛の機能で勝手に体が動きます、なはとが動かしています。はんちゃんとシアちゃんに戦って貰ったけど問題ないってお墨付きだった。僕は全然動いてないけど。あと最近は何エヌスがなはとに嫉妬するようになった。

とりあえず僕の日常は平穏だ。はんちゃんが警戒しているしおじさんとよく話すことが多くなったけど、それとは別に管理局やなのはちやんたちは何を考えているんだろうなあ。

|||||

12月△日

「私があの子供に会ったのは偶然でした」

シグナムはそう切り出した。彼女がいるのは海鳴市でリンディたちが居住を構えたマンションだ。そして彼女が語る相手はリンディとクロノの2人だ。そして話題はリンフォースを救った子供である。

「あの子が私に声をかけて来て、少し話した程度。その時はリンフォースを救ってくれたとは思いませんでした」

「面識はなかったのか？ だったら何故その子供は貴女に声を掛けたんだ？」

「……あの子供の保護者を私が蒐集したからです」

その告白に場の空気が重くのし掛かる錯覚があった。しかしシグナムは続きがあつたのでそのまま言葉を繋げる。

「しかしその時だけは戦うことはありませんでした」

「……それは何故？」

「自分の魔力を捧げる代わりに保護してる子供たちには手を出さなくてくれ、と。私はその条件を飲み、魔力を蒐集しました」

あの夜の会話を振り返る。戦わず魔力を蒐集した唯一の機会だったが、本音を言えば戦えば無事に済んだとも思っていなかった。向こうは決して万全とは言えなかつただろう。しかしベルカの戦乱で得た経験が警鐘を鳴らしていた。痛み分けか手痛い勝利になつただろう。勝てないとは言えないのはあの時の自分が必死であつたからだ。

「その保護者が貴女の事を伝えたと言う事か？」

「いえ、保護者の彼の振る舞いを見る限りはあり得ないと思います。恐らくはあの子供自身で私の事を知つたのだと思います」

「まあ、未確認の魔法を使う子供だ。貴女の事を調べるのも簡単なのかもかもしれない」

実際には10歳の少女の知識によつてだがさすがにその真実に至ることは不可能だった。『まさか』と言える程の真実であるからだ。

「質問をしてよろしいでしょうか？」

「ええ、何かしら？」

「あの子はリンフォースを救ってもらい、そしてあの子の保護者か

らは手を出さなくてくれと約束をしています」

「搜索には積極的にはなれないかしら？」

リンディが口にした『搜索』は、まさにこの話で一番の点だった。管理局としては子供とは言え、未知の魔法を使った存在を放置する事は出来ない。対し、シグナムは騎士としての約束をしている上にリインフォースを救って貰った恩がある。見付けて礼を伝えたい気持ちはあるが、あまり強引な手を使いたくなかった。

「言えた義理ではないのですが、向こうが話したくないと言われたなら強い姿勢で向き合う自信がありません」

「リインフォースの恩人ですもの。その気持ちは正しいわ。でも私たちとしてもその子供がどんな存在なのか確認しないといけないの」

「理解はしています。それに私も会ってお礼を伝えたいので探す事には協力します」

「ありがとう、シグナムさん。それで他に手がかりになる情報は無いかしら？」

搜索する事は既に決定しているが手がかりが少ない。目的の子供だが当時は防寒着を着込んでいた事もあって前髪が長いとかなのはたちと同世代とか曖昧なものだ。加えて隠蔽魔法を使っているようでサーチにも引つかからない。1つでも欲しい所だった。

「……私が蒐集した男性は傭兵をやっていたそうです」

「傭兵？」

「はい。しかもかなりの実力者でしょう。もし戦いになっていけば痛み分けになったでしょう」

「貴女にそこまで言わせるとは……。特徴は？」

「平凡な男性でしたが、もしかしたら傭兵を止める際に顔を変えている可能性があります。傭兵だったにしてはその気配を感じさせませんでした」

「顔を変えているなら管理局のデータから見付けるには難しそうね。他には？」

「申し訳ありません。これ以上の物はありません」

「そう、ありがとうシグナムさん。今日はこのくらいにしてはやてさ

んの所に戻っていいわ」

「ありがとうございます。では失礼します」

シグナムは礼をし、静かに部屋を退出していった。

1人静かに自分の足音を無意識に拾いながら、思わず隠してしまつたと、シグナムの心の後悔が産まれていた。

かの子供に繋がるのは彼女が蒐集した男性だけではなく、図書館で見せてくれた写真に写っていた少女。シアと呼ばれているフェイトによく似た、では足りないほどに瓜二つだった彼女の存在だ。そしてそのシアと言う少女は闇の書事件の後でアリシアだという確信を得ていた。彼女が既に故人であることを知った上で。

「……気付かれているだろうな」

しかしかのリンディは察しているだろうと考えていた。

「シグナムさん、何か隠しているわね」

シグナムが去つた後、リンディは水を零すかのようにその事を言葉にした。もちろん、同室していたクロノに伝えるためだ。

「例の子供を庇ってるのですか提督？」

「それは違うでしょう。シグナムさんだつてその子供に会いたいでしようから協力しないことはない筈よ。別の理由で隠しているのでしょうか」

とは言え、その理由は不明なのでここから先は想像で語るしかなくなる。そしてそれをここで語るにはまだ確実なものが足りない。

「とりあえず聞いた情報からその子供を探しましょう」

「そうですね。未知の魔法術式を扱う以上に、リインフォースだけを救い闇の書を破壊した以上は放置は出来ません」

「そうね。でも、傭兵ねえ」

「? 何か気になる事でも」

「いえ、昔懐かしい人を連想しただけよ」

「……それは『信頼すべき傭兵』ですか？」

「え？」

言い当てられた事にリンディは驚いた。

「どうしてクロノがその名前を？」

「実はグラム提督からデュランダルを受け取った後の別れ際、そう
呟いていたのを聞きました」

「名前だけ？」

「いえ、確か……『キミの言うとおりだったな』とも呟いていました」
「そう」

言い回しから予想するに会話をしたのは最近にと言う事だ。そし
て連想するに闇の書事件のさなかだ。まだ想像の域だがこの事件に
ついては知っていると言う事だ。

「ではその傭兵について調べるれば……」

「それは無理よ。管理局のデータじゃもう死亡扱いになってるもの」

「え？ ああ、偽装ですか」

「そうなのよ。まったく、その割には花だけは置いていくくせにね」
「花？」

少し喋りすぎたと、思わず口を手で覆う。しかしここまで言ってし
まったなら伝えてもいいだろうと判断する。

「クロノ。『信頼すべき傭兵』ミドル・バートはね。クライド、貴方の
父さんとは親友であり好敵手でもあった人物よ」

それを聞いたクロノは、奇妙な縁が繋がったとしか思えなかった。